

県営圃場整備事業（桐原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

門新遺跡 外割田地区



1996

新潟県和島村教育委員会

和島村埋蔵文化財調査報告書第5集

県営圃場整備事業（桐原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

門 新 遺 跡

外割田地区

1996

和島村教育委員会

題　字　和島村史編さん室　字木　茂

序

門新遺跡外割田地区の発掘調査は、現在進められている県営圃場整備事業（桐原地区）に伴い、実施されたものです。

門新遺跡周辺は過去、平成5年・6年の2次にわたって発掘調査がなされています。平成6年の調査では、巨大な主屋をもつ豪族の居宅が確認され、「延長六年十月」などと書かれた漆紙文書が県内で初めて検出されるなど、平安時代中期の在地領主層（開発領主）の居宅の実態を示す資料として、全国的に注目を集めました。

本年度調査の外割田地区は、平成6年調査区より500m南方の地点に位置し、豪族居宅より一世代前の集落跡が検出されました。幅が狭い水路部分の調査であったため、集落の全容を明らかにすることはできませんでしたが、10世紀始め頃の良好な一括土器が出土し、従来の編年上の空白を埋めるものとして、非常に重要な資料と言えます。

これらの成果を報告する本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願っております。

なお、この度の発掘調査にあたりまして、調査に同意くださいました地権者の方々および、長期間にわたりご厚意とご理解、ご支援を頂いた長岡農地事務所・三島北部土地改良区・県文化行政課等、関係諸機関に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成8年3月

和島村教育委員会

教育長 若井 勇

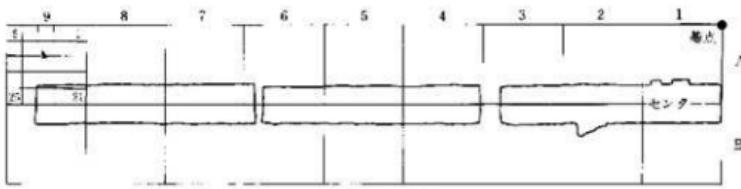
例　　言

- 本書は、新潟県三島郡和島村大字上桐字外割田に所在する、門新遺跡（外割田地区）の発掘調査報告書である。
- 今回の調査は県営同場整備事業（桐原地区）に伴うもので、和島村が新潟県から受託して実施した。
- 調査に要した経費は、農政部局が90.0%、文化財保護担当部局が10.0%を負担した。文化財保護担当部局分については、国庫及び県費の補助金交付を受けた。
- 遺物の注記は、「外ワッ田」とし、他に調査地区・トレンチ名・層位等を記した。
- 整理作業は、調査担当を中心に下記のメンバーの協力を得た。
小田富美子、久住幸江、近藤保、関川たゞ子、高橋智子、早川雅子、山口八千代(五十音順)
- 報告書の執筆は田中が担当した。
- 調査体制は以下の通りである。

調査主体	和島村教育委員会	教育長	若井 勇
調査指導	新潟県教育庁文化行政課	係 長	刀根与八郎
	"	主 任	高橋 保
調査担当	和島村教育委員会	主 事	田中 靖
事務局	"	事務局長	矢部政夫

- 発掘調査については、大字上桐有志の協力を得て実施した。また、発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々にご教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。(五十音順)
安藤正美、宇木 茂、金子拓男、久我 勇、小林昌二、坂井秀弥、田村浩司、寺村光晴、平川 南、木間信昭、三島北部土地改良区、新潟県農地部長岡農地事務所
- 本年度の発掘調査は、X=176,282.287・Y=25,456.860の点を基準として、排水路のセンターラインに直交する、一辺20mのグリッドを設定した。

グリッドの設定状況と各区画の呼称は、下図のとおりである。



グリット設定図

目 次

序

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	3
第Ⅲ章 発掘調査の概要	4
1. 基本層序	4
2. 検出された遺構	5
3. 検出された遺物	9
第Ⅳ章 まとめ	14
1. 平安時代の土器について	14
2. 門新遺跡群の動態について	17
第Ⅴ章 調査成果要約	23
引用参考文献	24

挿図目次

グリット設定図	例言
第1図 周辺の遺跡分布図	2
第2図 調査区土層柱状図	4
第3図 S B01	5
第4図 S B02	5
第5図 I 区小溝群方向別模式図	6
第6図 上坑平・断面図	7
第7図 水田跡柱状断面図	8
第8図 出土土器分類図	11
第9図 土器食器具種別組成表	15
第10図 土器食器具編年表	〈折り込み図版〉
第11図 門新周辺の地名と開発年代	18
第12図 土師器無台椀遺構別口径分布図	20

第13図	土器無台純口径・底径相関図 (1).....	21
第14図	土器無台純口径・底径相関図 (2).....	22

図版目次

(図面図版)	(写真図版)
図版1 遺構全体図 1/300 (I・II区)	図版14 調査区空中写真 全景・I区・III区
図版2 遺構全体図 1/300 (III区)・遺構詳 細図索引	図版15 I区俯瞰写真 (南から)・S B01、 S B02・I区小溝群
図版3 遺構詳細図 1/50 (I区 ①)	図版16 S D01・02土層断面
図版4 遺構詳細図 1/50 (I区 ②)	図版17 S D07 "
図版5 遺構詳細図 1/50 (I区 ③)	SK14遺物出土状況
図版6 遺構詳細図 1/50 (II区)	図版18 II区 S D20
図版7 遺構詳細図 1/50 (III区 ①)	SK15
図版8 遺構詳細図 1/50 (III区 ②)	調査風景
図版9 遺構詳細図 1/50 (III区 ③)	図版19 III区俯瞰写真 西から
図版10 遺構内出土土器 (平安時代)	水田跡 東から
図版11 遺構内出土土器 (平安時代)	水田跡 南から
図版12 遺構内・外出土土器 (平安時代)	図版20 遺構内出土土器 (平安時代)
図版13 遺構内・外出土土器 (古墳時代)	図版21 遺構内・外出土土器 (平安時代)
	図版22 遺構内・外出土土器 (古墳時代)

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

門新遺跡外割田地区は、新潟県和島村大字上桐字外割田に所在する。この地区は、昭和20年代に実施された耕地整理前まで、畑地が多く分布する微高地であった。この微高地の性格は、烏崎川の支流が形成した自然堤防と考えられ、平成5年～同6年にかけて調査された門新遺跡谷地地区の微高地から連続するものである。

門新遺跡は当初、谷地地区周辺のみが遺跡範囲として周知されており、古墳時代前期の水田址と、平安時代中期の豪族居宅及び「延長六年十月」の年紀を持つ漆紙文書などが、過去2ヶ月の調査で検出されている。外割田地区は谷地地区から南へ約500mの所に位置し、從来遺跡の存在が認識されなかった地域である。しかし前述したように、本地区が谷地から続く良好な自然堤防上にあることから、桐原地区県営圃場整備事業の実施に先立って、平成6年12月および、翌7年3月に同地区周辺に対して遺跡の分布・確認調査を実施した。

その結果、過去に畑が多く分布していた微高地を中心に、古墳時代および平安時代中期の遺構・遺物が検出され、内容的に前述した谷地地区とは密接に関連する遺跡であることが明らかになった。また地形的にも両者は連続することから、本地区に対しては別個の遺跡名はつけず、門新遺跡外割田地区と呼称することにした。

以上の調査成果を基に長岡農地事務所と協議を行い、遺跡範囲内に対しては出来うるかぎり包含層や遺構面に対して影響が及ばないよう設計変更することで合意し、平成7年度に実施する本調査の範囲は、排水路部分約900mに限定されることになった。

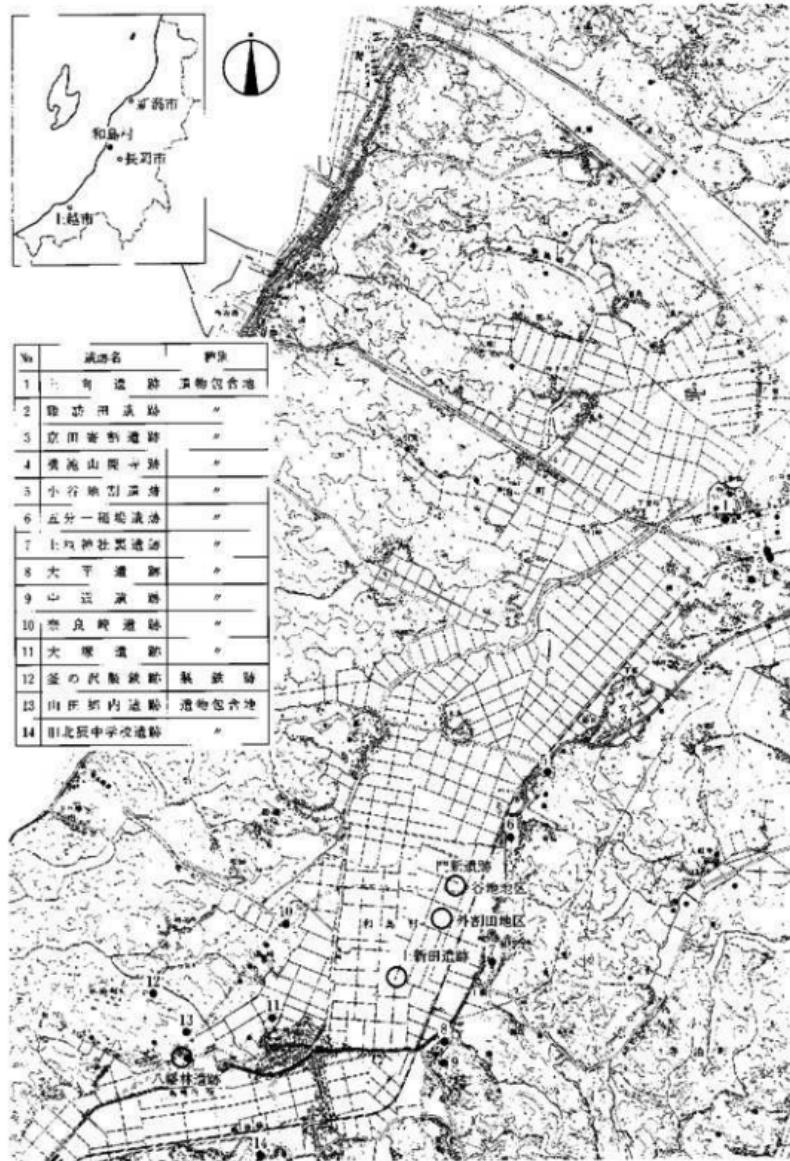
2. 平成7年度調査の経過

発掘調査は平成7年5月26日に着手し、現農道および排水溝によって発掘区をI区～III区に区分して実施した。

調査は6月末までは順調に進み、I区において平安時代中期に位置づけられる柱穴・土坑・溝、III区では古墳時代前期の水田跡が確認された。しかし、7月～8月の前半にかけての天候不順は5回もの大規模な水没をもたらし、その排水と復旧でかなりの時間的ロスとなった。

天候が安定したお盆明けから調査はようやく軌道にのり、9月7日までに残りのII区の調査と、I区で確認された多数の柱穴から孤立柱建物を復元する補足作業を完了したが、II区では平安時代中期の溝1条と土坑1基が確認されたのみで、出土遺物も極めて少量であった。

9月8日からは発掘区の遺構平面図作成作業に入り、14日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と、ローリングタワー上からの遺構俯瞰写真撮影をおこない、同日をもって現場作業を終了した。



第1図 周辺の遺跡分布図

第II章 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

和島村の地形は、三島山地から派生する東側丘陵・島崎川に沿った島崎川低地・海岸に面した西側丘陵の三種に大きく分類される。門新遺跡（谷地・外割田地区）は島崎川低地の中の自然堤防上に立地し、昭和20年代後半の耕地整理まで畠地が点在し、長雨による塘水に際しても、帯状に水がかからない微高地であった。同様の自然堤防は現河道の東側にのみ発達し、遺跡の所在する桐原地区においては3条が見られる。しかし、門新遺跡の来る自然堤防以外では開拓が進み、断片的にしか確認できない。これら自然堤防を形成した河川としては、旧島崎川あるいはその支流である荒巻・三瀬ヶ谷からの出水であったと考えられる。

3列の自然堤防のうち最も東側では、遺跡の存在は確認されていないが、西列では上新田遺跡、中央列では門新遺跡谷地地区・同外割田地区が所在する。これら3遺跡は近似した動態を示し、古墳時代前期および平安時代中期の2時期に遺跡のピークがくる。その時期以外は、遺構・遺物がほとんど見られないことから、自然堤防の利用は恒常的ではなかった可能性が高い。

2. 歴史的環境

和島村の所在する島崎川流域は、古代においては古志郡に属しており、製鉄遺跡や須恵器窯跡などの生産遺跡が高密度に分布する。また『延喜式』に記載された古志郡内6座のうち3座が流域内に集中し、白鳳期に創建された横瀧山施寺や古志郡衙関連の八幡林遺跡の存在から、郡内でも中枢的な地域であったとみられる。

八幡林遺跡は8世紀前半～9世紀後半にかけて機能した官衙遺跡であり、4次に渡る調査で古志郡衙あるいは古志大領と関わる施設と捉えられている。また出土遺物の中に「大?家隣」と書かれた墨書き土器が見られたことから、同駅が近接して存在したことや、北陸道が從来考えられていた海岸ルートではなく、島崎川沿いのコースをとることがほぼ確実となった。八幡林遺跡は9世紀中頃を境に急速に衰退し、10世紀初頭頃には機能を停止しており、全国的な律令体制崩壊に連動した動きと考えられる。

八幡林遺跡の廃絶とは入れ違いに、官衙風の様相を持つ門新遺跡（谷地地区）が出現する。島崎川流域では9世紀後半以降に、自然堤防上に進出する遺跡が急増する。これは、郡の衰退に半比例して勢力を疎ばしてきた富豪層による、活発な新田開発に起因するもので、中でも官衙風の配置をとる谷地地区は、開発に際して的一大拠点であった可能性が高い。八幡林遺跡から門新遺跡への交替は、全国的な社会情勢の変化に呼応したものといえる。

9世紀後半以降、自然堤防上に進出した遺跡は例外なく10世紀代で廃絶しており、中世へと継続しない点は注目される。

第III章 発掘調査の概要

1. 基本層序

外割田地区は平成5～6年度に調査した谷地地区と同様に、昭和20年代の開拓整備によって著しく削平されている。このため約30cmの厚みをもつ水田耕土の直下が、遺構確認面である黄褐色土（V層）となる部分が多く、I～II区では安定した遺物包含層は存在しない。III区は自然堤防から後背湿地へと変換する西斜面あたるため、西へ行くほどV層までの堆積が厚く、古墳時代前期の遺物包含層であるIV層が残存している。基盤であるV層の黄褐色土は、低地部において還元状態となり青灰色を呈する。

I 層 耕作土

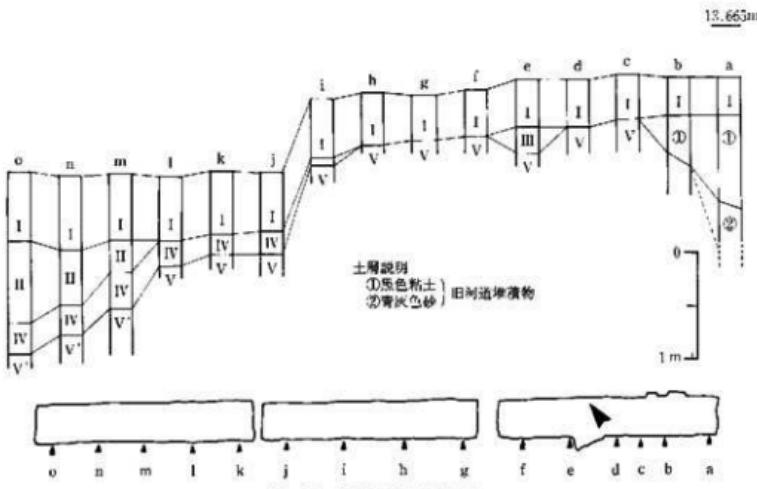
II 層 茶褐色を呈する泥炭層で、III区の低地部にのみ存在する。

III 層 暗灰褐色土で炭化物の小粒を含む。平安時代の遺物包含層と考えられる。○付近にのみ見られる。

IV 層 暗灰色土で炭化物の小粒を含む。古墳時代前期の遺物包含層と考えられ、水田跡の部分では、耕作や踏み込みのためV・V'層との攪拌が見られる。II区の西端～III区にかけて分布する。

V 層 黄褐色土で、この上面で古墳時代前期および平安時代の遺構を確認した。

V' 層 V層がIII区の低地部で還元状態となり、青灰色を呈したもの。



第2図 調査区土層柱状図

2. 検出された遺構

今回の調査で確認された遺構は、平安時代中期の掘立柱建物・土坑・溝および、古墳時代前期の水田跡などがある。また人為的な遺構ではないが、I区東端で確認された旧河道は、谷地区の調査で検出された河道の延長である可能性が高い。以下では、主要遺構について次期別に概要を述べる。

（平安時代の遺構）

a. 掘立柱建物

I区東端の河道に面して2棟が確認されている。この地点にはこれ以外にも多數のピットが存在することから、建物の実数はもっと多かったものと推定される。

S B01 北面に庇が付く小型の東西棟で、身舎部分は梁間2間(3.7m)×桁行3間(4.6m)を測り、庇の出は0.9mである。建物の主軸はN-3°Eを向く。柱穴のうち身舎の3基と庇の2基は、他遺構との重複や調査範囲外に所在するなどの理由で確認できなかった。柱掘方は身舎・庇とも直径が20cm前後の円形で、深さは東妻のそれが9.5cmと浅い以外、20~30cmを測る。

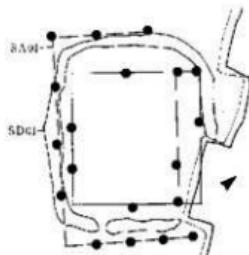
本建物には雨落溝と考えられる周溝(S D01)および、北面を除く3方を囲うS A01が伴うものと考えられる。

S B02 S B01とはほぼ同じ位置に重複して確認された建物で、梁間2間(3.8m)×桁行3間(6.2m)を測る。建物の主軸はN 11°Wを向き、S B01より若干西に振れる。柱穴のうち3基は、調査範囲外に所在する等で確認できなかった。柱掘方は不整形のものが多く、規模は東西の妻が長径20~30cm・深さ15cm前後、その他は長径30~40cm・深さ40cm前後である。

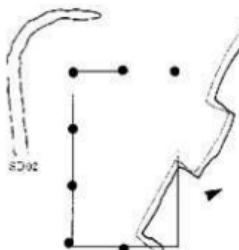
本建物には南側に並行して所在するS D02が伴うものと思われる。S D01との切り合い関係はS D02→S D01(旧→新)であることから、S B02はS B01に先行する可能性が高い。

b. 棚列

S A01 S B01の北面を除く三方を「コ」の字型に囲うもので、長軸はN-2°-Eを向き、S B01のそれとはほぼ一致する。規模は南北が4間(7.4m)、東西が4間(7.4m)と推定されるが、南東隅の柱穴は旧河道による浸食で失われている可能性が高い。棚列を構成する柱穴は平面が円形を呈し、直径20~30cm・深さ30cm前後を測るものが多い。



第3図 S B01



第4図 S B02

c. 溝

掘立柱建物に伴う方形周溝状のものと、その西側で確認された縱横に走る小溝群などがあり、S D20がII区にある以外、全てI区に所在する。

S D01 S B01の四面を囲う方形周溝で、東辺の2ヵ所でブリッジ状に溝が途切れる。本溝はS B01の雨落溝の可能性が高く、規模は長さが東西6.6m×南北5.6m（溝の心々距離）・幅30~50cm・深さ10cm前後を測る。覆土は炭化物を多く含む暗褐色土の單層で、完形の土師器碗や灰釉陶器の高台を利用した転用現などが出土している。

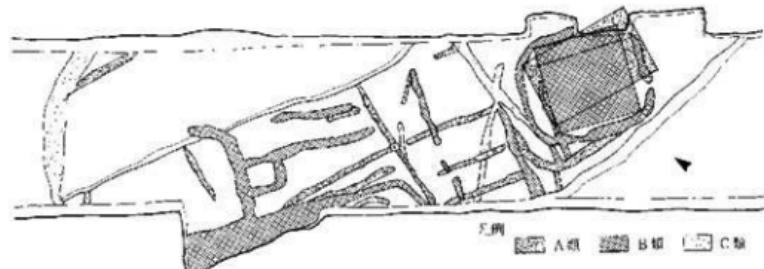
S D02 S D01と同様に方形周溝であった可能性が高いが、耕地整理時の削平や他造構との重複のために遺存状況は不良で、わずかに南辺と西南のコーナーが確認されるのみである。残存部の規模は幅50cm・深さ10cm前後を測る。溝の覆土は炭化物を含む暗灰色土で、土師器続の細片が少量出土している。

本溝は方向の一致から、S B02に伴う可能性が高い。他造構との関係ではS D01と重複し、切り合い関係から本溝の方が先行する。

S D07 I区中央の南壁際で約12mにわたって確認されたものである。溝の方向はほぼ東西を指し、西へ行くほど溝幅・深度を増している。西端での幅は1.2m・深さ60cmを測る。覆土の上層には炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積しており、図版12-25の須恵器大甕など、多量の遺物が出土した。

S D09等、小溝群 掘立柱建物の西側で確認されたもので、幅30~40cm・深さ10~20cm程度の規模の溝が縱横に走る。溝は方向および堆積土から、A類：S B01の方向とほぼ一致（直交）し、炭化物を多量に含む暗褐色土を覆土とするもの、B類：S B02の方向とほぼ一致し、暗灰色土を覆土とするもの、C類：覆土はB類と近似するが、溝の方向がA・B類とは大きく異なるもの、の3類に分類される。

各類の新旧関係は、B類→A類・C類→A類（旧→新）となることが判明している。B類とC類の関係は、覆土が相似しているため切り合いを確認できず、新旧関係は不明である。また



第5図 I区小溝群方向別模式図

溝B類→溝A類（Ⅲ→Ⅳ）の関係は、溝と方向を同一にするS B02・S B01の先後関係と矛盾しない。覆土からは、土師器・須恵器・灰釉陶器の細片が少量出土しているのみである。

本溝群の具体的な性格については不明であるが、覆土の類似や方向の共通性から、S B01およびS B02と同一の時期に機能していたものと推定される。

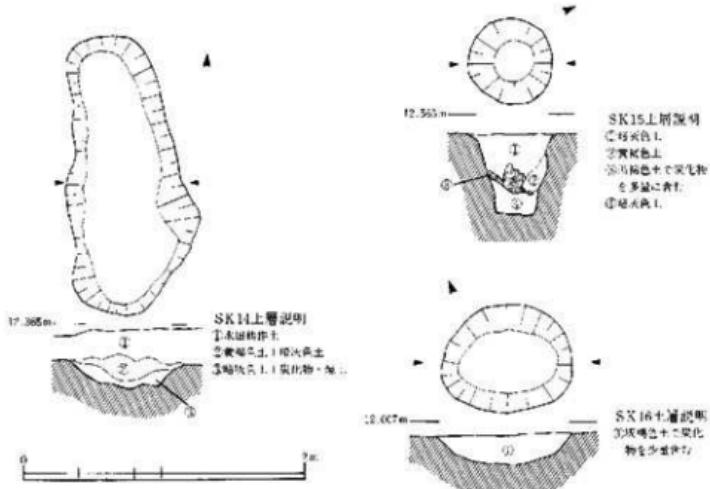
S D20 II区に所在し、方向は前述した小溝群のB類と一致する。前回の耕地整理時の削平で溝底部がかろうじて確認される。遺存状態が良好な部分では、幅50cm・深さ15cmを測る。覆土は炭化物を含む暗灰色土で、土師器細片が少量出土した。本溝は覆土の状況および方向から、平安時代の遺構と考えられる。

c. 土坑

S K14 I区建物群の東側に隣接して所在し、長径2.0m・短径0.9mを測る不整形円形の土坑である。深さは20cmと浅く、前回の耕地整理時の削平や水田耕作によって、基底部のみが残存するものと考えられる。覆土は2層に分層され、下層は燒土粒・炭化物を多量に含む暗灰色土である。

本土坑の底面から完形を中心とする土師器塊が15個体以上も出土している。当該期前後に多い、祭祀に使用した土器の一括施棄に関わるものであろう。

S K15 II区に所在し、直径60cm・深さ55cmを測る円形の土坑である。底面はほぼフラットで、覆土は4層に細分される。土坑の中位には、炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積しており、同層からロクロ土師器の細片が出土した。



第6図 土坑平・断面図

(古墳時代の遺構)

a. 水田跡

S X01~06 III区西側の緩斜面において、6区画の水田跡が確認された。いずれも調査範囲が狭いために、平面形や規模など各区画の全体像は不明である。

本水田跡はIV層中に構築されたものと考えられるが、V'層上面で初めて区画の一部を識別することができた。このため畦畔は基底部しか識別できず、耕作土も約10cmの厚さが確認できたに過ぎない。畦畔には等高線と平行するものと、それに直交するものとがあり、前者は基底部幅で1~1.5m規模のものが3条確認されている。後者は調査区の南壁際に見られた1条のみで、基底部幅は1m前後を測る。畦畔のうちの1本には切れ目が存在し、水口にあたる部分と考えられる。耕作土は灰褐色土(IV層)と青灰色土(V'層)の混土で構成され、微細な炭化物および、古墳時代の土器細片を少量含んでいる。耕作土除去後のV'層上面には、灰褐色を呈する斑状のシミが多數見られ、耕作痕あるいは踏み込み等に起因する土層の乱れと考えられる。

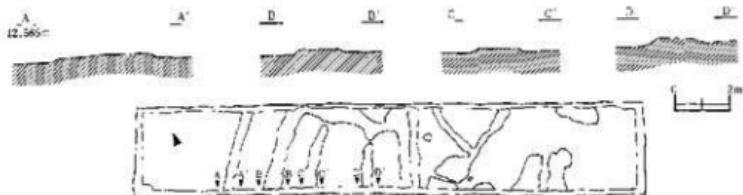
水田跡の所属時期は、IV層中に構築されている点から古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。周辺に所在する門新遺跡谷地地区および上新田遺跡の調査では、やや先行する時期の水田跡が確認されており、付近一帯はこの前後に、広く水田化されていた可能性が高い。

c. 不明遺構

S X07~12 III区の東側で検出された不整形の落ち込みである。深さはいずれも10cm前後で浅く、炭化物の小粒を含む灰褐色土を覆土とする。落ち込みの底面は比較的平坦で、灰褐色を呈する斑状のシミも見られることから、水田の可能性もある。しかし、前述したものとは形状・規模が大きく異なるため、ここでは不明遺構とした。覆土からは、古墳時代の土器細片が少量出土している。

b. 土坑

S K16 III区に所在し、長径92cm・短径76cm・深さ20cmを測る梢円形の土坑である。断面形は浅いスリ鉢状を呈する。覆土は炭化物の小粒を含む灰褐色土で、土坑底面から図版13-52~53の高杯が出土している。



第7図 水田跡畦畔断面図

3. 検出された遺物

今年度の調査で検出された遺物は、コンテナで8箱である。内訳は平安時代の資料が7箱、古墳時代のものが1箱で、これ以外のものとしては中世の珠洲焼4点および、近世の陶磁器が8点見られるに過ぎない。

(平安時代の土器)

(1) 土器分類

灰釉陶器・須恵器・土師器・黒色土師器が見られる。当該期の遺構の分布と同様に、大半の資料はI区において検出された。

以下では、灰釉陶器・須恵器・土師器・黒色土師器の順に、それぞれ器種ごとに細部の形態によって分類を行った。なお、各器種の中で出土量が少ないものについては、細分せずに個体説明にとどめる。

a. 灰釉陶器

有台椀・皿が見られ、4個体が識別できる。全形を伺える資料はなく詳細は不明だが、図版10-17などは施釉方法が刷毛渦りであることから、光ヶ丘1号窯式期に位置づけられるものと推定される。

b. 須恵器

有台椀・無台杯・甕・長頸瓶が見られるが、食器類は非常に少ない。これらの生産地は、全て佐渡小泊窯と推定される。

【有台椀】 4個体が識別されるが、全形を伺える資料は1個体のみである。図版12-50は、体部が「へ」の字状に直線的に立ち上がり、幅広のしっかりした高台を持つ。他の3点も同様の器形をとるものと推定される。胎土は粗く、微細な白色の鉱物粒を多量に含んでいる。門新遺跡(谷地地区) 1993年調査区の旧河道から出土した資料に、同じ特徴を示す有台椀がみられる [山中1995]。

【無台杯】 5個体が出土している。図版10-18は口縁部を欠損するが、丸底気味の底部を持ち器壁は非常に薄い。底部の切り落しはヘラキリである。胎土は粗く、微細な白色の鉱物粒を多く含んでいる。

【甕】 1個体以上存在する。唯一全体の器形が伺える図版11-25は、器高が70cmを超える大型品である。口縁部は「く」の字状に折れて大きく外反し、外面は突起や波状文で飾られる。このほか、口縁が直立気味で比較的短く立ち上がり、外面に装饰を持たないタイプも見られる。法量は前述した25を最大に幾タイプか存在するようであるが、残存部位が少ないので詳細は不明である。

【長頸瓶】 1個体のみ出土している。図版10-20は底部および口縁部を大きく欠損しており、全体の器形は不明である。

c. 土師器

無台碗・皿・甕・鍋が見られ、中でも無台碗の出土量が卓越している。

〔無台碗〕 77個体以上が識別されるが、SD01・SD07・SK14の3遺構からの出土量だけで全体の56%以上を占めている。これらは、器形などの特徴から幾タイプかに細分され、以下では門新遺跡谷地地区における分類〔田中1995〕を踏襲する。

A類は比較的底径が小さく、底部から口縁へと内湾気味に立ち上がる。本類は身の深さからA I・A IIに細分される。

B類は大きな底部から口縁が直線的に立ち上がるもので、やはり身の深さからB I・B IIの2類に細分される。

C類は大きな底部から口縁が内湾気味に立ち上がるもので、身の深さからC I・C II類に細分される。

D類は大きな底部から口縁が内湾気味に立ち上がり、端部で大きく外反するもので、身の深さからD I・D II類に細分される。

〔皿〕 無紐の須恵器坏蓋と器形・製作技術が類似するもので、底部はヘラケズリによって平坦に仕上げられ、端部は明確な折れ縁となる。前の報告では「蓋」として取り上げたが、が、セットになる身が確認されないことから、皿であった可能性が高い。1個体のみ出土している。

〔長 甕〕 2個体が識別される。ロクロ整形のものと非ロクロのものが存在し、前者は底部が丸底となり、体部下半の内外面に叩き痕を残す。後者はいわゆる佐渡型の甕と考えられ、「く」の字に折れる比較的長い口縁部を持ち、長甕になるものと推定される。同様な資料は、出雲崎町番場遺跡でも出土しており、土器の胎土分析の結果から佐渡窯の可能性が指摘されている〔坂井1988〕。

〔小 甕〕 3個体が識別され、ロクロ整形のものと非ロクロのものが存在する。後者は器形・器面調整の手法から佐渡系の土器と考えられる。

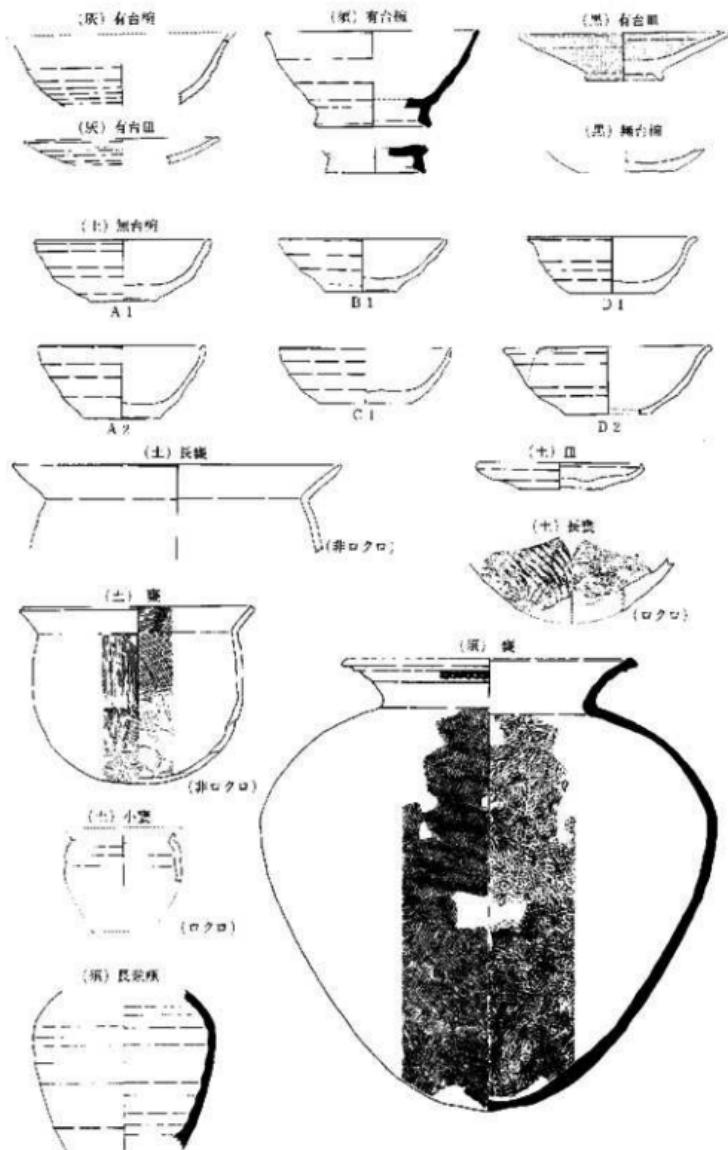
〔 鍋 〕 ロクロ整形された口縁部の小破片が、1点のみ出土している。

d. 黒色土師器

無台碗・有台皿が見られるが、出土量は少ない。

〔無台碗〕 内面が黒色処理されたもので、6個体程度が識別できる。全形を伺える資料はないが、身の深いものが主体をなすようである。

〔有台皿〕 1個体のみ出土している。図版10-16は内外面を黒色処理したもので、口径に比して底径が小さい。口縁部の立ち上がりは直線的で、「ハ」の字形に大きく開く。高台は貼り付けによって形成され、断面カマボコ形をなす。高台の内側には、回転糸切りの痕跡がかすかに残る。



第8図 出土土器分類図

(2) 出土土器各説

以下では出土土器について、遺構ごとにその概要を述べる。

S D01 (図版12-39~42)

S D01は前述したようにS B01の雨落ち溝と考えられ、灰釉陶器有台碗1個体、土師器無台碗6個体が出土している。

42は灰釉陶器有台碗で、低い三日月高台を持つ。本例は体部以上が意識的に削りとられ、高台の内側を硯に転用している。

39~41は土師器無台碗で、それぞれA I類・D II類に分類される。

S D07 (図版10・11-1~26)

S D07からは最も多くの資料が出土しており、識別が可能な各器種の個体数は灰釉陶器有台皿1個体、須恵器有台碗1個体・無台杯2個体・壺4個体・長頸瓶1個体、土師器無台碗23個体・皿1個体・長甕2個体・小甕3個体、黒色土師器有台皿1個体・無台碗2個体である。

17は灰釉陶器有台皿で、光・丘1号窯式に比定されるものである。

19は須恵器有台碗で、「ハ」の字形に直線的に開く口縁部を持つ。底部を欠損するが、谷地地区1993年調査区の旧河道内川土資料と同一の器形をとるものと推定される。胎土は粗く、白色の微粒子を多く含む。

18は須恵器無台杯で、体部の外傾度が大きく底部は丸底気味である。胎土の状況は前述した19と同一である。

25~26は須恵器の甕である。25は器高72.6cmを測る大型品で、口縁部が「く」の字状に大きく外半し、外面を突帯や波状文で飾るものである。26は上半部を欠損するもので、残存部の最大径は40.0cmを測り、内外面にそれぞれ平行・格子目状の印きが施される。

20は須恵器の長頸瓶で、口頸部と底部を大きく欠損する。体部の最大径は13.0cmを測り、この器種では小型の部類に入る。

1~13は土師器の無台碗で、底径が大きいC・D類が主体である。口径は12~14cmの領域に入るものが多い。器高は3cmを測るごく浅いもの(9)と、4cm前後のものが見られる。4は底部付近の外面が再調整されるものである。

14は土師器の皿で、無紐の須恵器杯蓋と器形・製作技術が類似する。端部は明確な折れ縁となり、底部外面は丁寧にヘラケズリされている。類例は門新遺跡谷地区SD03(1994年調査)で確認されている。

23~24は土師器の長甕で、ロクロ整形のものと非ロクロのものがある。後者はいわゆる佐渡型の甕と考えられる。

21~22は土師器の小甕で、やはりロクロ整形のものと非ロクロのものが見られる。22は丸底を呈し、内外面に厚く炭化物が付着するもので、器形や整形の技法から佐渡系の土器と考えら

れる。

15は黒色土師器の無台碗で、内面は黒色処理され、底部外面は丁寧なヘラケズリによって平坦に仕上げられている。

16は内外面黒色処理された有台皿で、灰釉陶器の器形を忠実に摹すものである。

S K 14 (図版12-27~38)

長径2.0m・短径0.9mの精円形の土坑から比較的多くの資料が出土しており、各器種の識別可能な個体数は、土師器無台碗15個体・黒色土師器無台碗1個体である。木土坑内から出土した土器は非常に完形率が高い。

27~37は土師器無台碗で、底径が大きなC・D類が主体である。口径は12cm前後の領域に集中するが、14cm程度のものも見られる。器高は4cm位のものがほとんどであるが、ごく浅いものの(37)と身の深いもの(35)も1個体づつ確認される。

38は黒色土師器の無台碗で、底部外面は丁寧なヘラケズリで平坦に仕上げられている。

遺構外出土土器 (図版12-48~51)

本遺跡は前述したように、過去の耕作整理で包含層が大きく削除されており、遺構外出土土器はコンテナで1箱に過ぎない。耕作土から僅かに出土した資料も、長年の耕作で軽磨を受け、器種の同定も難しい資料が多かった。ゆえに以下では、灰釉陶器など出土数の少ない資料について記載し、内容を補足する。

49は灰釉陶器の有台碗で、口縁端部が端反りとなるものと推定される。

50~51は須恵器の有台碗で、幅広の高い高台を持つものである。50は唯一全形が明らかなもので、門新遺跡谷地地区山河道内出土(1993年調査)の有台碗と器形・胎土が一致する。

(古墳時代の土器)

古墳時代の土器はIII区を中心に出土しており、総量はコンテナで約1箱である。器種としては高杯・壺・甌が見られるが、小破片が多く施個体数は不明である。

図版13 52~56は裾が強く屈曲外反する脚部を持つ「畿内系」の高杯である。52~53はS K 16から出土したもので、途中で屈曲して大きく広がる杯部を持つ。54は水川跡(S X01)の耕作上に包含されていたものである。

57~60は壺あるいは甌で、口縁部が比較的長いものと短いものがある。端部はいずれも丸く作られている。

61は口縁部が逆「ハ」の字状に長く伸びるもので、いわゆる直口壺になると考へられる。

62~65は底部および体部破片である。

以上の土器群の年代は、畿内系高杯の定着や小型器台が確認出来ない事実から、山三賀II遺跡における古墳III期や、一之口遺跡東地盤におけるIV期に対応し、III区で確認された水川跡等の遺構も、ほぼこの時期に伴うものであろう

第IV章 まとめ

1. 平安時代の土器について

(1) はじめに

今年度の調査では、掘立柱建物周辺の上坑・溝を中心にコンテナで約7箱の土器が出土した。特にS D07・S K14の資料で総量の過半数を占めており、これら的一群は、食膳具の形態や組成から、昨年度の報告書における編年「IH中1995」でII期に位置づけられる資料に近いものと推定される。II期は門新遺跡（谷地地区）Ⅲ河道出土土器を基準に設定されたもので、以下では本年度の資料を検討し、Ⅲ河道内出土土器との対比を行う。

(2) 食膳具の組成

最も多くの遺物が出土したS D07の種類別の組成は、第9図のようになる。

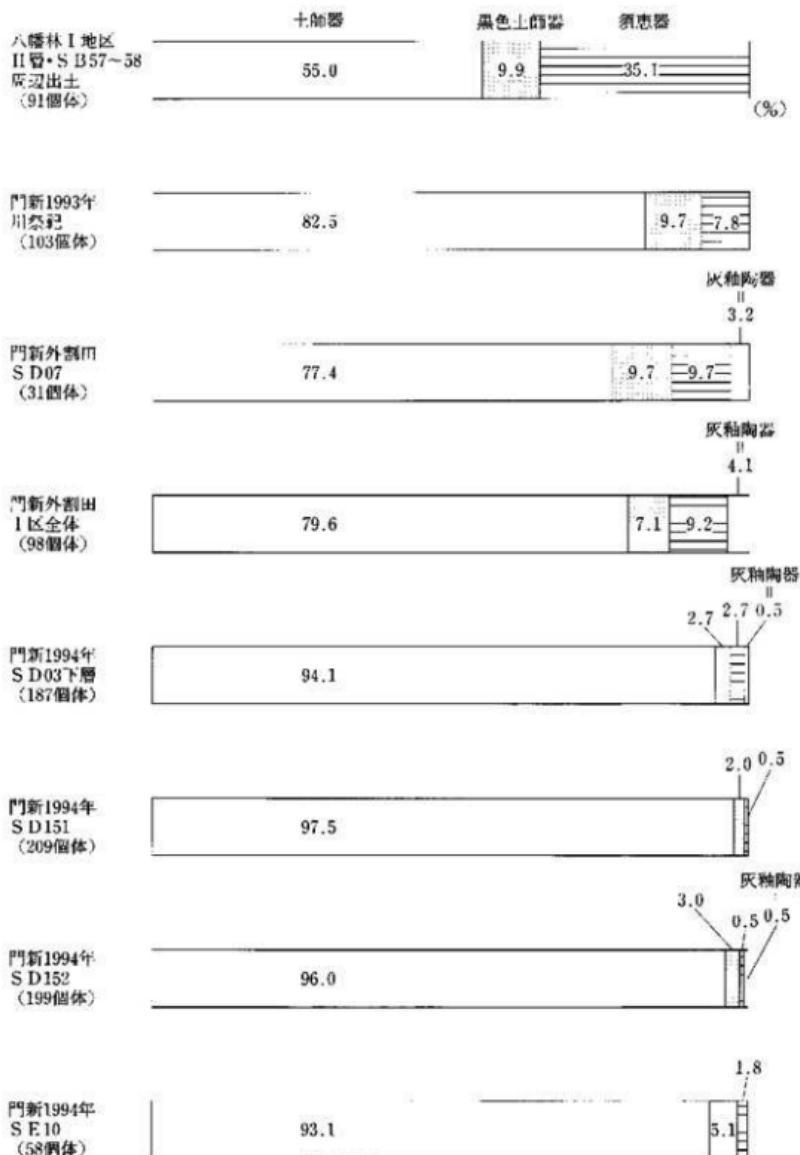
須恵器の占める比率は9.7%で、「延長六年」の漆紙文書を作ったS D152などIII期のそれ（3%以下）よりは高く、II期の旧河道内出土資料の数値（7.8%）に近い。須恵器の器種としては有台碗と無台杯があり、前者は大きく欠損し底部の形状が明らかでないが、遺構外出土の同形態の土器から、幅広で高い高台をもつものと推定される。

灰釉陶器は非常に少なく、S D07で1点・I区全体を含めて4点が見られるに過ぎない。S D07出土のものは、光ヶ丘1号窯式期に並行する。Ⅲ河道内出土資料中には、灰釉陶器は確認されていない。

黒色土師器には、いわゆる内黒の無台碗と両面を黒色処理した有台皿がある。S D07の組成の中で占める割合は9.7%であり、旧河道内のそれ（9.7%）と一致する。両面黒色処理の土器は、年代が下る一之口遺跡東地区河川跡などに若干見られるが、当該期前後の県内では稀な器種と考えられる。

S D07の中で77.4%を占める土師器食膳具には、無台碗と折れ縁の皿が見られる。後者は旧河道出土資料には見られなかった器種で、類例はIII期に位置づけられる谷地地区S D07において確認されている。土師器無台碗はC I・B I・D I類が主体で、底径が5cmを超える大きなものがほとんどである。口径は12~13cm台のものが多いが、14cm前後のやや大型品も定量存在する。底部の切り離しは全て回転糸切りで、ヘラケズリ・ヘラミガキによって器面を再調整したものも見られるが、絶対量は少ない。

S K14出土の土器は器種の偏りが著しく、黒色土師器の無台碗1個体のはかは、すべて上師



第9図 土器食膳具種別組成表

器の無台碗で構成される。後者は完形率が非常に高く、9世紀後半以降に盛行する土師器無台碗埋納の祭祀土坑であったと考えられる(註1)。15個体以上が出土した土師器無台碗は、身の著しく深いCII類が含まれている点以外はSD07の資料に近く、近似した時期に位置づけられるものと思われる。

SD07・SK14以外の遺構では、僅かな資料しか得られていないが、土師器無台碗等に型式差は認められない。のことから外割田地区は、建物等の遺構に若干の重複は見られるが、遺跡の存続期間は比較的短かったものと推定される。

(3) 編年的位置づけ

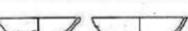
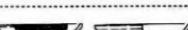
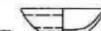
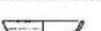
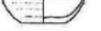
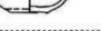
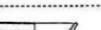
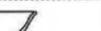
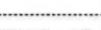
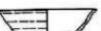
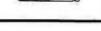
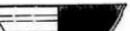
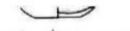
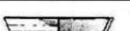
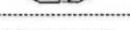
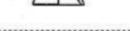
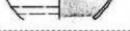
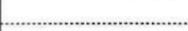
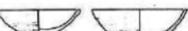
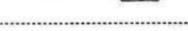
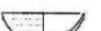
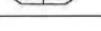
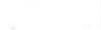
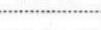
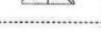
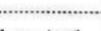
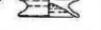
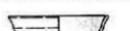
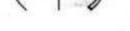
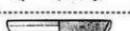
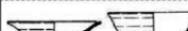
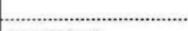
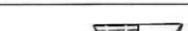
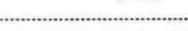
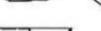
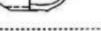
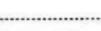
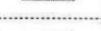
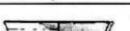
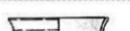
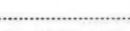
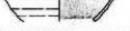
外割田地区出土土器は、黒色土師器の割合がやや低い点と、須恵器の技法で作られた土師器の折れ縁皿・少量の灰釉陶器を含む点以外は、谷地地区旧河道川土資料と共に特徴を示している。

幅広で高脚の高台をもつ特徴的な須恵器有台碗は、I期(八幡林遺跡終焉期)の資料には認められず、II期の旧河道出土資料では定量存在することから、当該期に出現した新しい器種の可能性が高い。このタイプの有台碗は、牛座地である佐渡小泊廻跡ではカメ焼窯期以降に見られる。しかし、カメ焼~江の下窯期に並行する良好な資料が出土した新潟市小丸山遺跡や、前述した八幡林遺跡などでは未確認であり、II期以前の越後側にはあまり搬入されなかった器種である可能性が高い。この有台碗は続くIII期においても残存するが、谷地地区的SD151出土資料に代表されるように、高台は退化した華奢なものに変化する。今年度出土の資料は、いずれも高台が強く踏ん張り、しっかりとしていることから、II期の段階に位置づけられる可能性が高い。

灰釉陶器は4点出土したのみで、SD07からは光ヶ丘1号窯式期に並行する有台皿が出土している。同窯式の年代は9世紀後半~10世紀前葉頃と推定されており、10世紀第1四半紀と考えられるII期の年代観と矛盾しない。なお、III期の谷地地区SD03では、後出する大原2号窯式期の有台皿が共存している。

食器具で主体をなす土師器の無台碗は、汎用・組成・形態などの諸特徴が、II期の旧河道川土資料に近く、同一型式に属するものと考えられる。I期の八幡林遺跡の資料と比較すると、法量ではほとんど変化がないが、I期にはほとんど見られないD類が定量存在することや、器皿をヘラケズリ・ミガキで調整するものが減少するなど、調整が粗雑化している点で異なる。またIII期の資料と比較しても、口径がやや大きく底部の小型化が進んでいない点に違いが認められる。

(註1) 破片で出土した資料も、多くは過去の耕地整理とその後の耕作で破壊されたものと考えられ、本来は完形であった可能性が高い。

		須恵器 無台杯 有台杯・鉢	土器器 柄 A 1 A 2 B 1 B 2 C 1 C 2 D 1, 2 有台鉢・皿	黒色土 鋸 鋸
(八幡林 I 地区) II層、SE59-SK20等	I 期	  	                                                                                               	
9世紀末葉 (門新93年調査)	川奈紀	                                                                                                   		
SD01、07 柱掘方				
SD03下層 「延長6年」 928年	III 期	                                            		
SD151				
SD152				
SE10				

第10回 土器全般具類年表

以上の点から、外割田地区出土土器は門新編年Ⅱ期に並行し、10世紀第1四半期を中心とする時期に位置づけられる可能性が高い。昨年度の報告でⅡ期の基準とした谷地地区旧河道出土資料は、河道という性格から出土状況に不安定な部分もあったが、本年度の外割田地区的資料はⅡ期の内容を補強するものといえよう。

2. 門新遺跡群の動態について

(1) 時期別の概要

以下では烏崎川低地の自然堤防上に立地する、門新遺跡群（谷地地区・外割田地区・上新田遺跡）の時期別の概要についてまとめてみたい。

（古墳時代以前）

谷地地区の旧河道から縄文時代晚期の土器が出土しており、上流部に当該期の遺跡が存在する可能性があるのか、同地区の1994年調査地点周辺でも、過去に磨製石斧が採集されるなど、断片的な資料が得られている。

（古墳時代前期）

古墳時代前期に位置づけられる土器が各地点から出土している。居住域は確証されていないが、調査された各地点で同時期の水路・水田跡が検出されていることから、周辺一帯は当該期において、広く水田化された可能性が強い。しかし、このような状況は長続きせず、当該期以降平安時代までは、谷地地区の旧河道で古墳時代後期の土器が若干検出された以外、遺構・遺物の存在しない空白期間となる。

（平安時代中期）

再び各地点で遺構・遺物が確認できるようになり、自然堤防の高所には掘立柱建物群が構築される。その遺営時期は各地点で微妙にずれており、存続時期も重ならないことから、上新田遺跡（9世紀後半）→門新遺跡外割田地区（10世紀前葉）→同、谷地地区（10世紀中葉～後半）の順に、南から北へ遺跡が移動した可能性がある。

10世紀後半を最後に門新遺跡群では遺構・遺物がほとんど確認できず、わずかに表土から、15世紀頃の珠洲鏡と近世陶器が検出されているにすぎない。

(2) 遺跡群の動態

前項で述べたように門新遺跡の乗る自然堤防は、古墳時代前期に最初の開発が実施され、周辺一帯は広く水田化されたものと考えられる。この開発に際しては、東側の低丘陵上に所在する上樹神社裏遺跡など、弥生時代後期後半から続く有力集落の関与が想定される。

しかし、古墳時代前期に開かれたこれらの水田は、長期間維持されるものではなく、中期以降には継続しないことが判明している。これは一帯の標高が高く、近年でも水掛けに苦労する、



第11図 門新周辺の地名と開発年代

水利の便の悪さに起因する可能性があり、そのためか律令期においても積極的な土地利用の痕跡は確認できない。

この地域が再開発されるのは、八幡林遺跡が衰退・廃絶する9世紀後半～10世紀頃と考えられ、全国的に新田開発が活発化し、低地部にも遺跡が進出する時期と一致する。当該期の水田跡は不明瞭であるが、河道に面して何地点かに建物群が存在し、谷地地区の1994年調査区では、巨大な主屋を中心に大小の建物で構成されるブロック（開発領主の居宅？）が確認されている。上新田遺跡・門新遺跡外周川地区の調査区は、遺跡の縁辺部にあたったため詳細は不明だが、同様の中核部が調査区外に存在するものと推定される。各地点の存続期間は非常に短く、ちょうど一世代程度であることから、代ごとに南から北へ拠点を移動していた可能性もありうる。

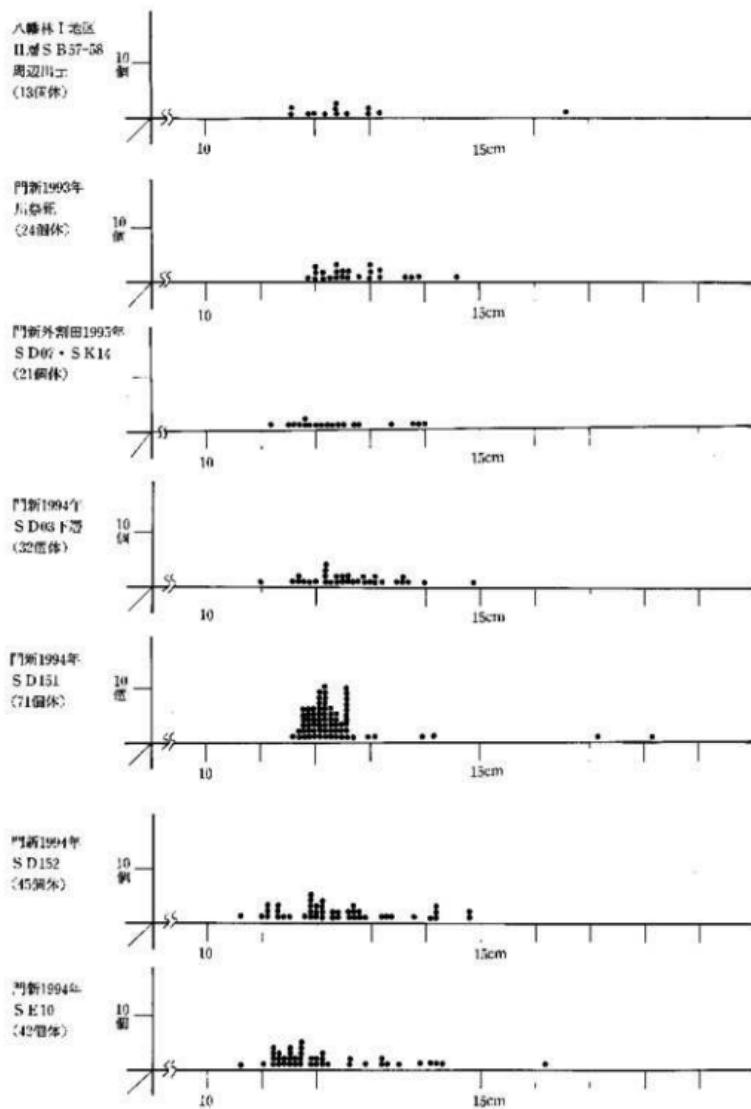
島崎川低地の再開発のために自然堤防上に進出した遺跡は、10世紀後半頃の谷地地区C期を最後に姿を消し、以降へは断続しないことが確認されている。この短命さは、水田経営に不利な前述した立地条件とともに、開発を主導した在地領主層の支配基盤の未熟さに起因するものと思われる。

中世以降における当該地域の土地利用の実態は不明だが、遺構・遺物がほとんど存在しないことから、居住城としては利用されなかった可能性が高い。また耕地としても、当該地域の水田は寛永6年（1629）の上総（原）村の検地帳にはほとんど見えず、明暦2年（1659）のそれに丸右衛門新田村（註1）の耕地として初めて現れることから、この30年の間に新田として再々開発された可能性が高い。下谷地・中谷地など、明暦検地帳になくて明治23年の更正図に見える水田は、より新しい時期に開発されたものであろう（第11図）。

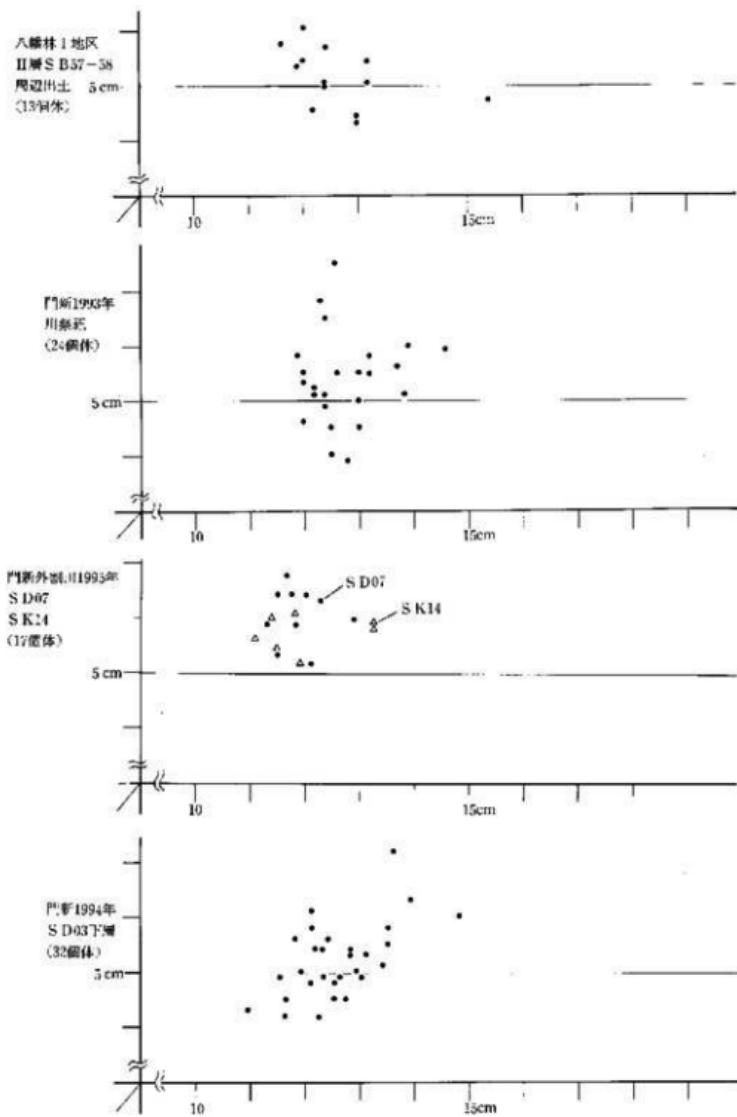
明暦段階の、この地の水田16町6反3畝26歩の内訳は、中田3町3反5畝26歩・下田13町2反8畝で上田は存在せず、享保6年（1721）の村明細帳を見ても、用水の便がなく毎年丁損するなど、「彼是難通惡田ニ御座候」と記されるほどであった。

この宿命的な水利面の問題が解決され、一番が現在のような美田に変わるのは、昭和20年代の、近代的な圃場整備完了以降であった。

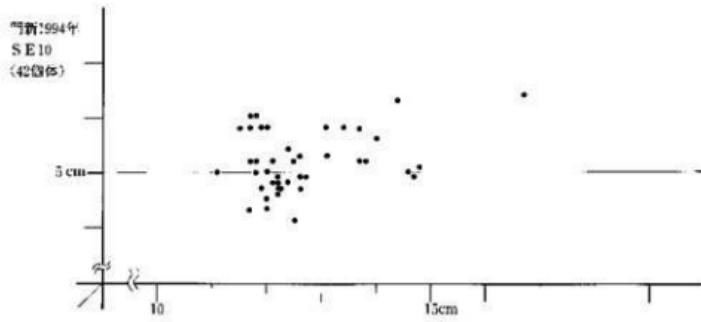
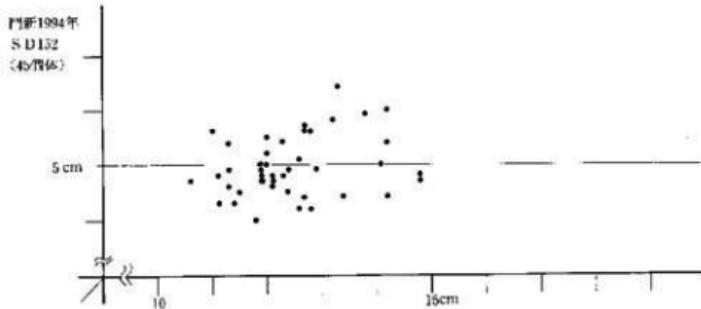
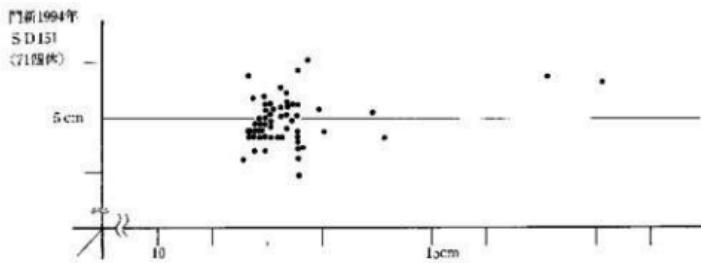
（註1） 同村は耕地はあるが人家は存在せず、上総村の人々が出作していた。寛文8年（1668）には、村名が門新村と改められている。



第12図 土師器無台椀遺構別口径分布図



第13図 土師器無台椀口径・底径相関図 (I)



第14図 土師器無台椀口径・底径相関図

第V章 調査成果要約

本年度の門新遺跡（外洲川地区）の調査成果を要約すると、以下のようになる。

(遺構について)

- ① 自然河川に沿って営まれた平安時代中期の集落の一部と、古墳時代の水田跡が検出された。
- ② 平安時代中期の集落では、方形周溝を伴う掘立柱建物2棟と、畠と推定される小溝群が確認されている。
- ③ 掘立柱建物に近接した位置に、完形の土師器無台碗を多量に出上した祭祀土坑(SK14)が存在する。
- ④ 平安時代中期の集落の存続時期は、共伴した土器の様相から10世紀の第1四半期を中心とするものと考えられる。
- ⑤ 古墳時代前期の遺構としては、水田跡と土坑が確認されている。
- ⑥ 水田跡は調査区が水路幅に限定されているために全容を明らかにできなかつたが、等高線に沿って細長い短冊形の区画になると推定される。
- ⑦ 古墳時代の土坑(SK16)からは、完形の畿内系高杯が出土した。

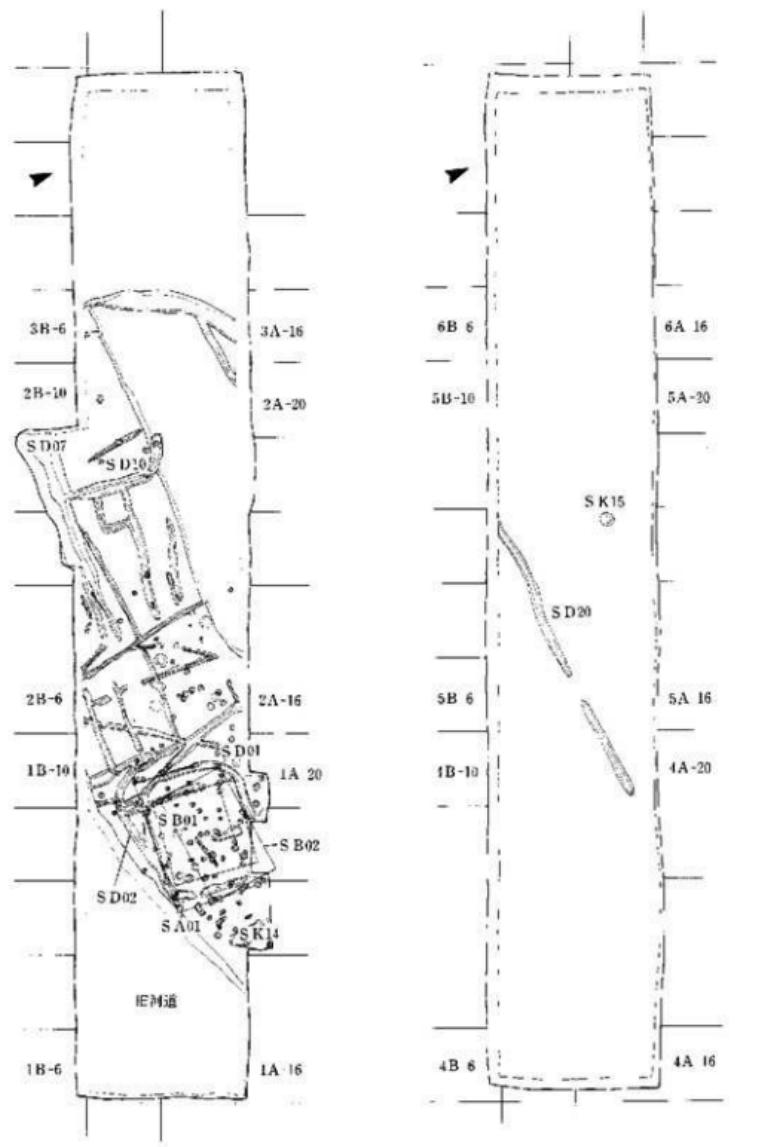
(遺物について)

- ① 平安時代中期の遺物には、土師器・須志器・灰釉陶器・黒色土師器・鉄滓が見られる。黒色土師器には、いわゆる内黒のもののほかに内外面黒色処理のものも存在する。
- ② 灰釉陶器で型式が明らかなものは、光ヶ丘1号窯式期に対比されるものである。
- ③ 土器の史年代は、「延長六年十月」の漆紙文書を共伴した谷地地区の資料より明らかに先行し、10世紀の第1四半期を中心とするものと考えられる。
- ④ 古墳時代前期の土器は、畿内系高杯の定着や小形器台が確認できない様相から、山三賀II遺跡におけるIV期や、一之口遺跡東地区におけるIV期に対応するものと考えられる。

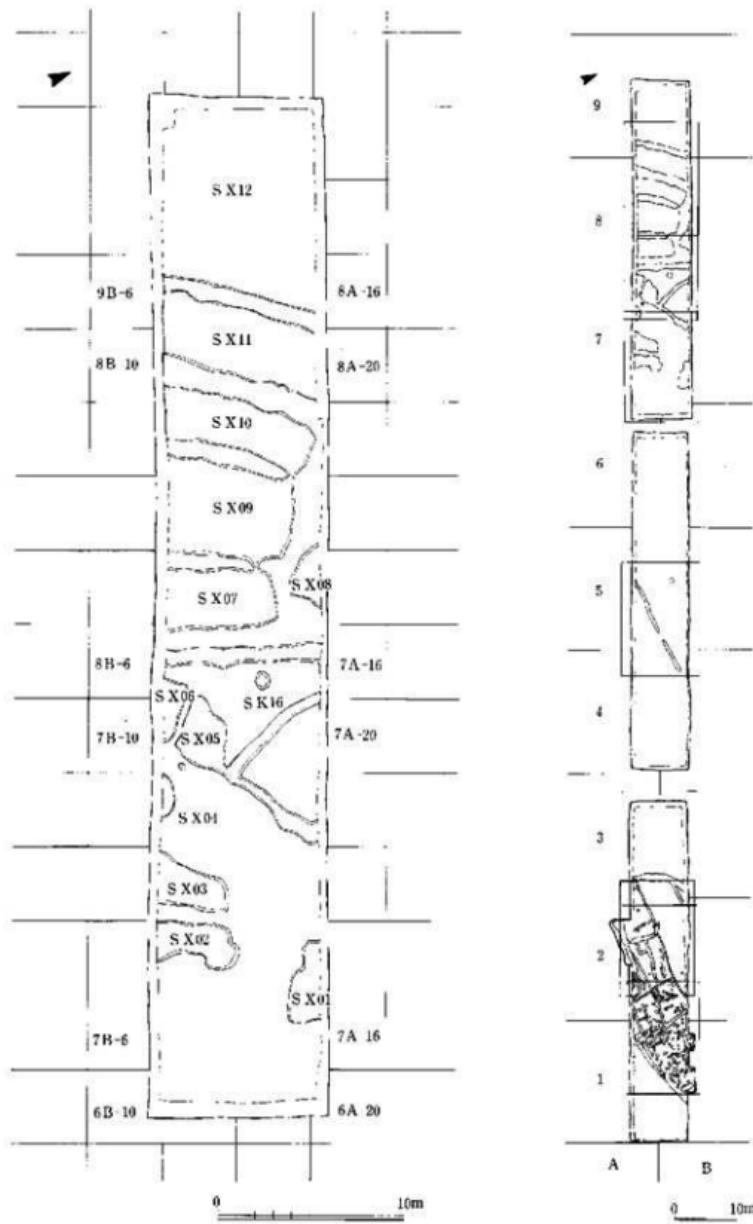
引用参考文献

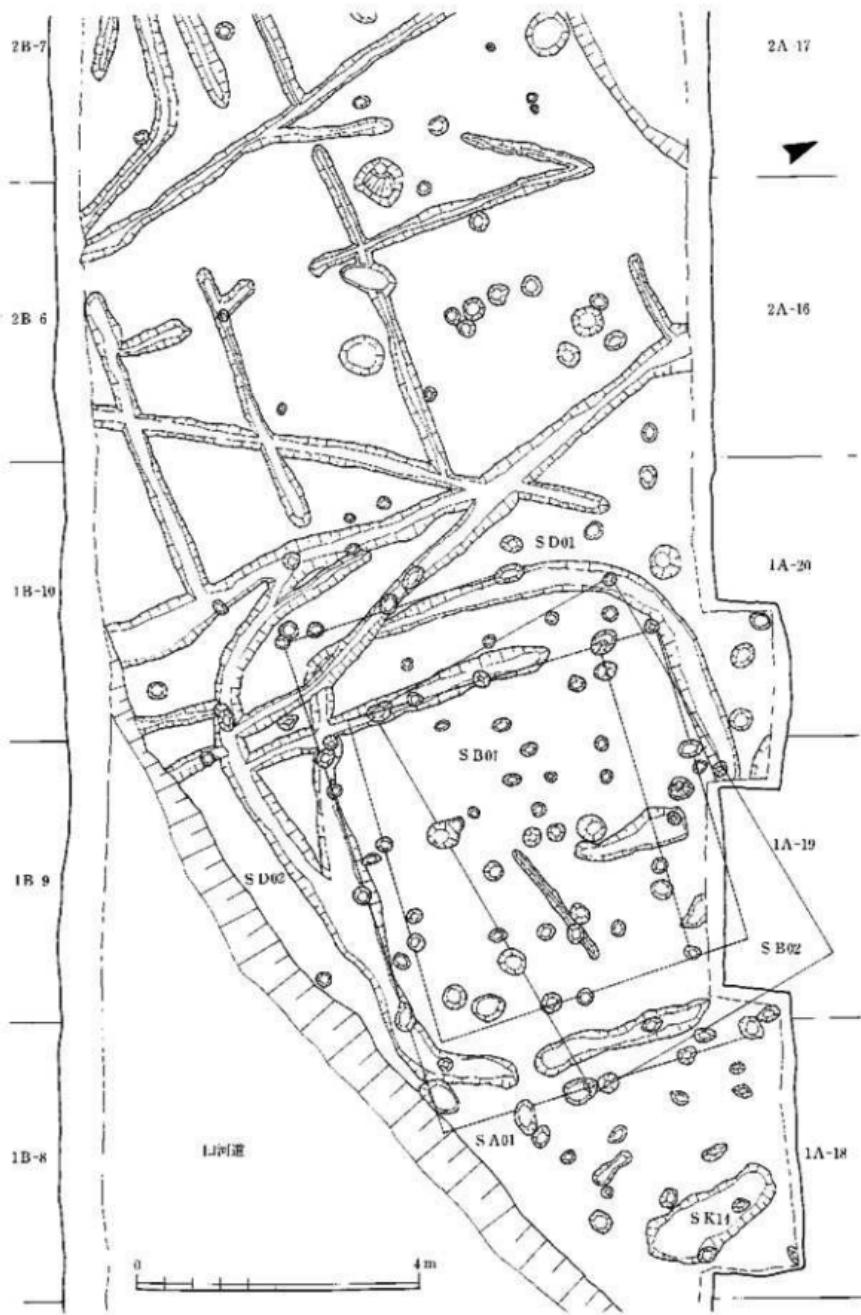
- 春日真実 1991 「佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- 春日真実 1992 「越後・佐渡における須恵器生産終末期の様相」『北陸古代土器研究』第2集 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1993 「工朝国家期の越後——上越市一之口遺跡(西地区)・新潟市小丸山遺跡を事例として——」『新潟考古』4号 新潟県考古学会
- 川村浩司・坂井秀弥 1993 「I 北陸北東部の古墳出現前後の様相」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 坂井秀弥ほか 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1987 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 番場遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・鶴間正明・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』2号 新潟県考古学会
- 鈴木俊成ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区」新潟県教育委員会 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保ほか 1993 「和島村埋蔵文化財調査報告書第2集 八幡林遺跡」和島村教育委員会
- 田中 靖ほか 1994 「和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡」和島村教育委員会
- 田中 靖 1995 「和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡」和島村教育委員会
- 山本 盛ほか 1992 「和島村埋蔵文化財調査報告書第1集 八幡林遺跡」和島村教育委員会
- 和島村史編さん室 1990 「村落史資料集③ 上村二ヶ村」
- 和島村 1996 「和島村史 資料編II 近世」

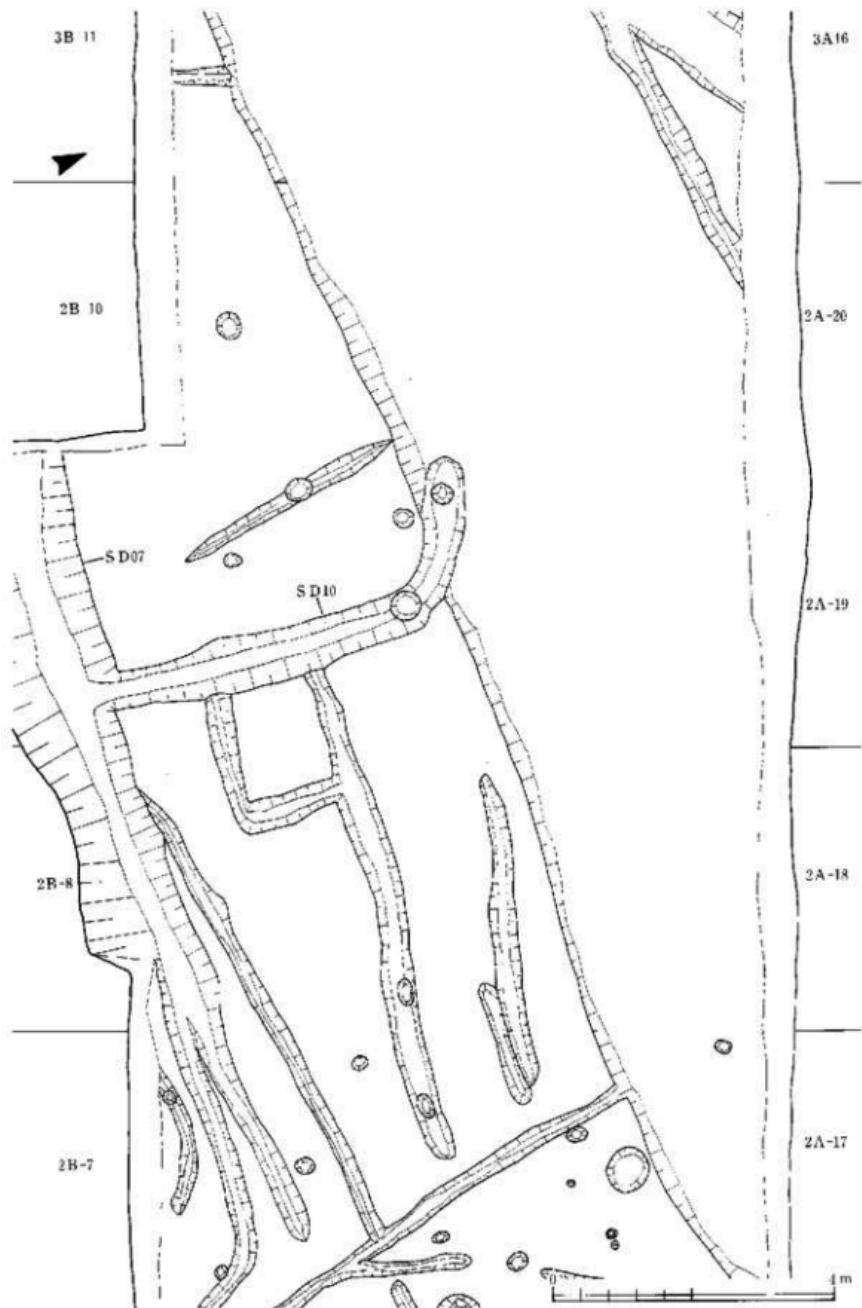
図 版

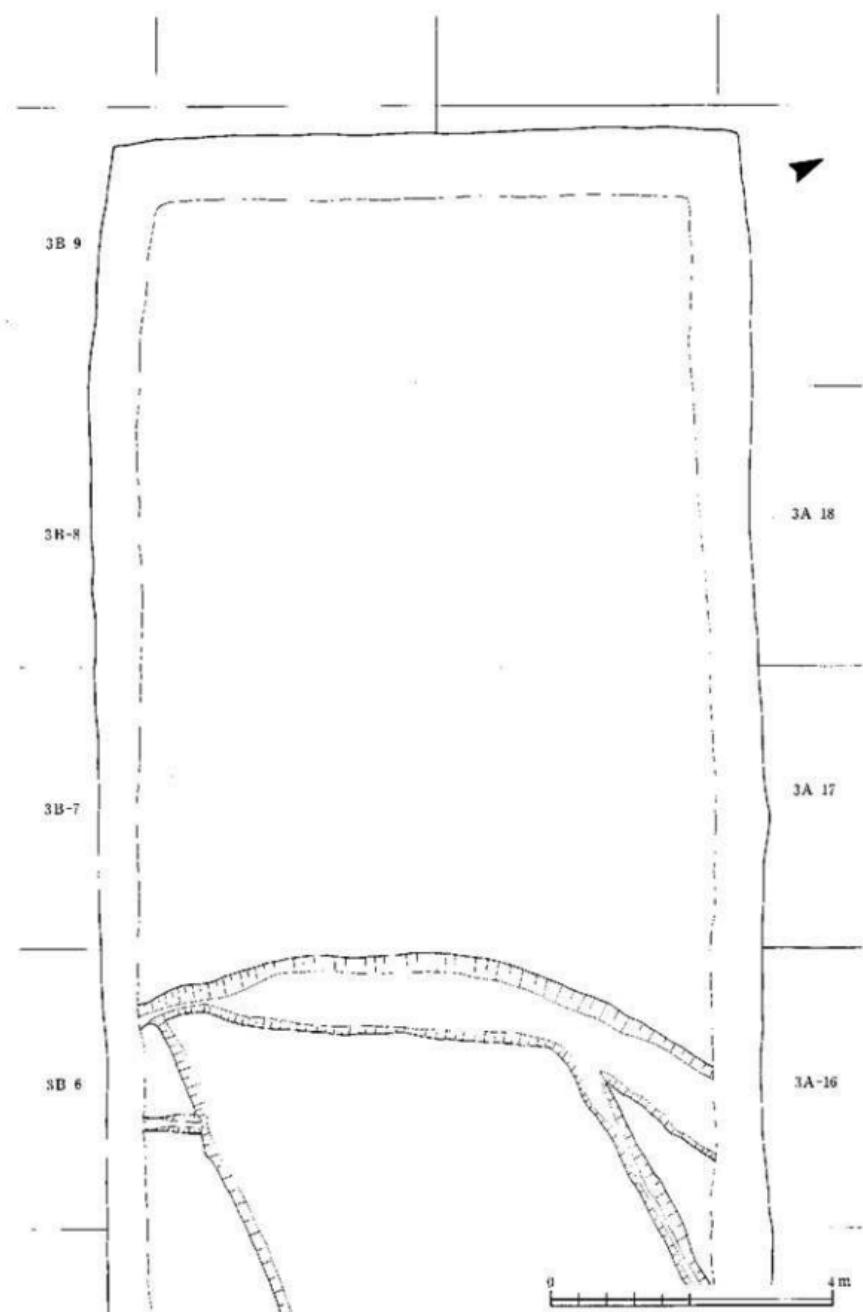


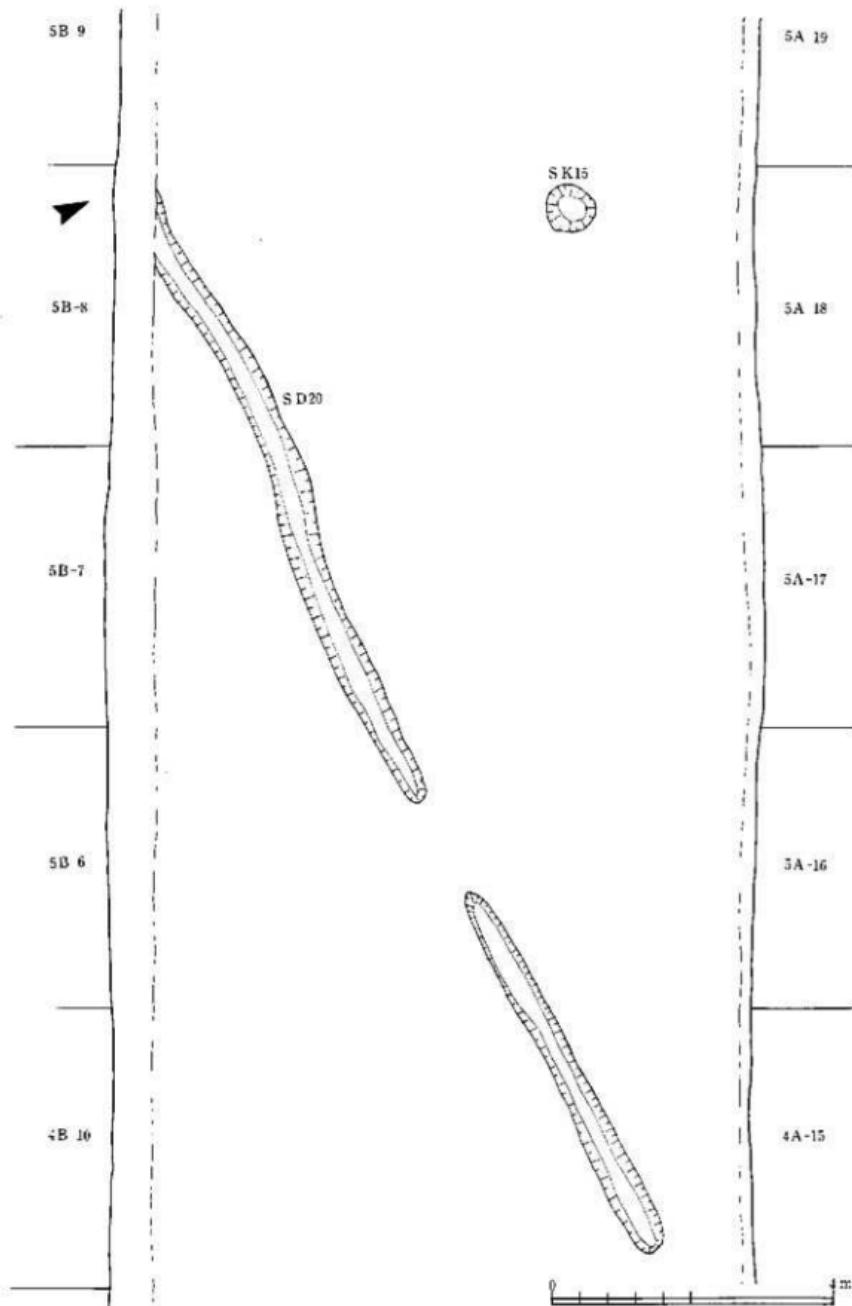
0 10m

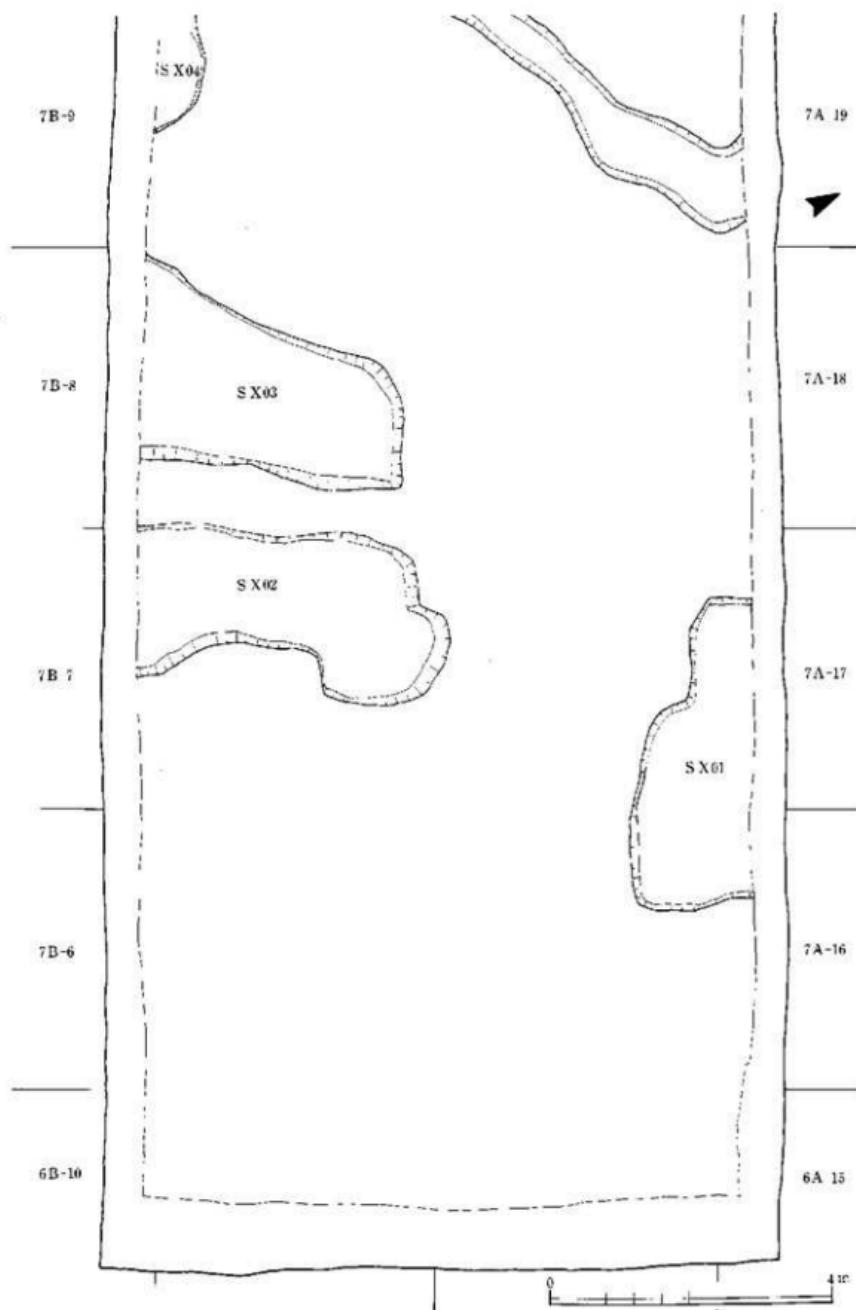


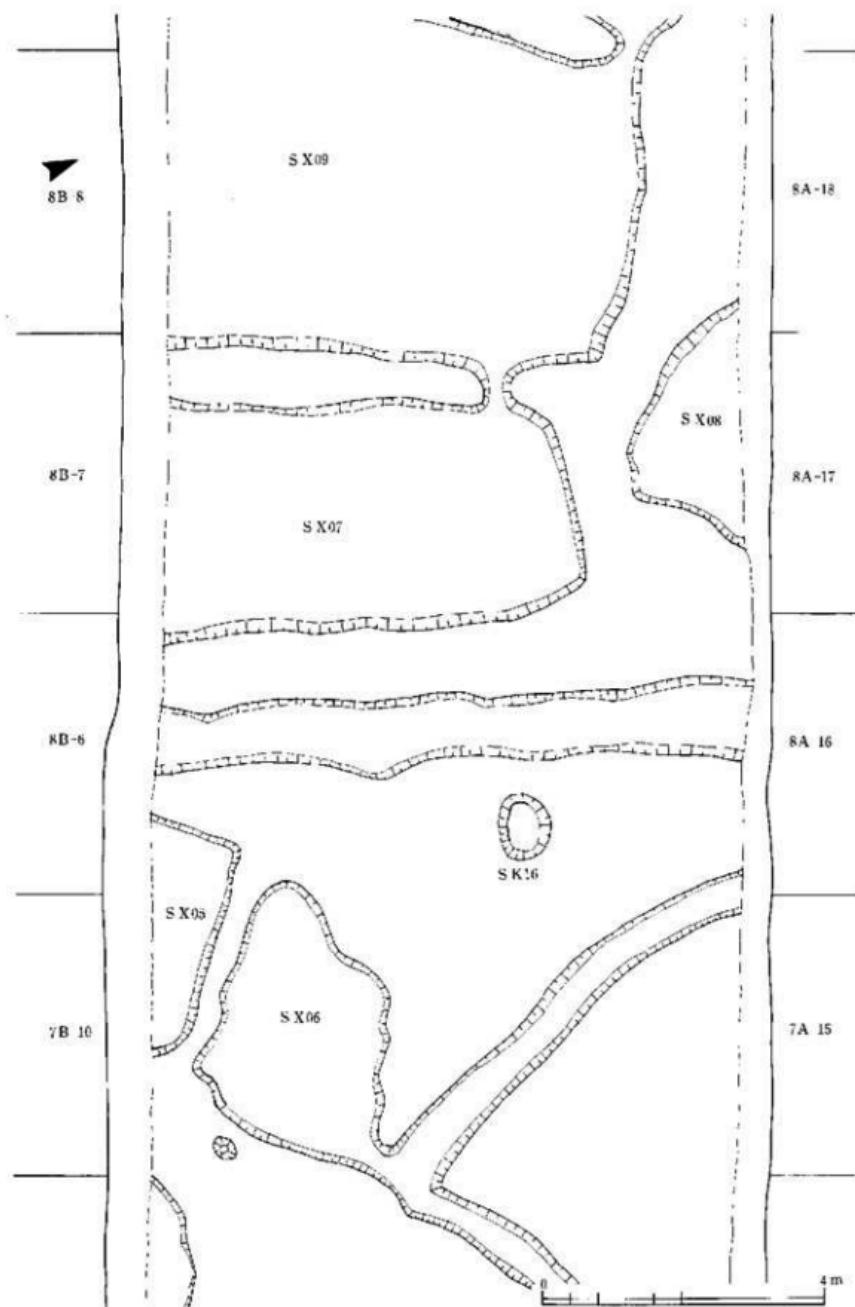












9B-7

S XI2

9B-6

S XII

8B-10

S XI0

8B-9

S X09

8B-8

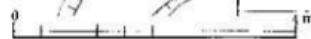
9A-17

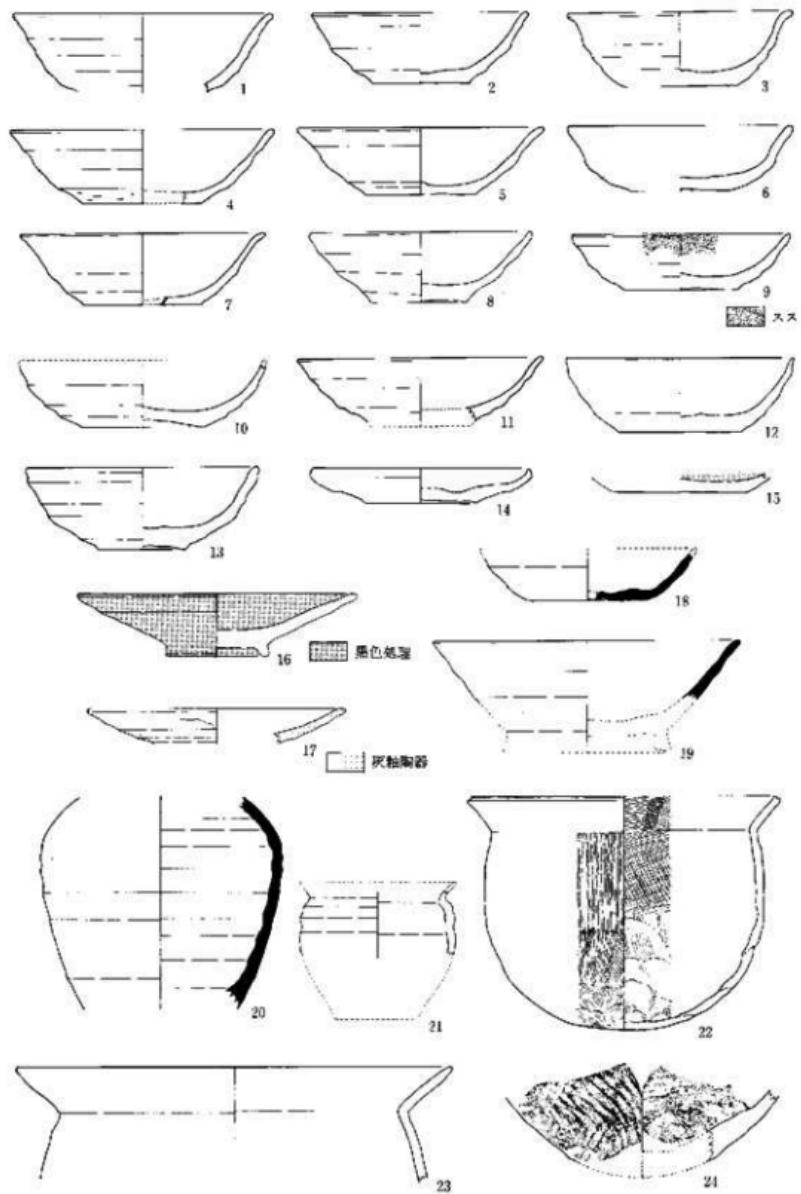
9A-16

8A-20

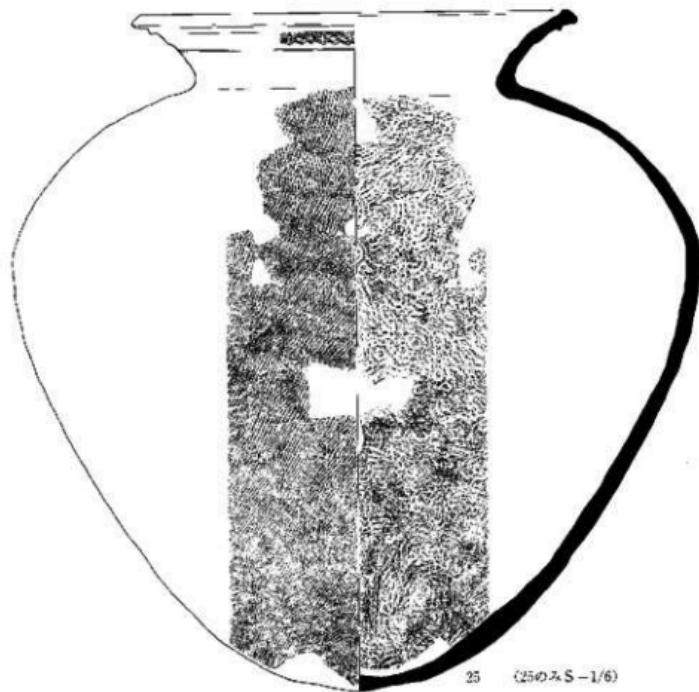
8A-19

8A-18

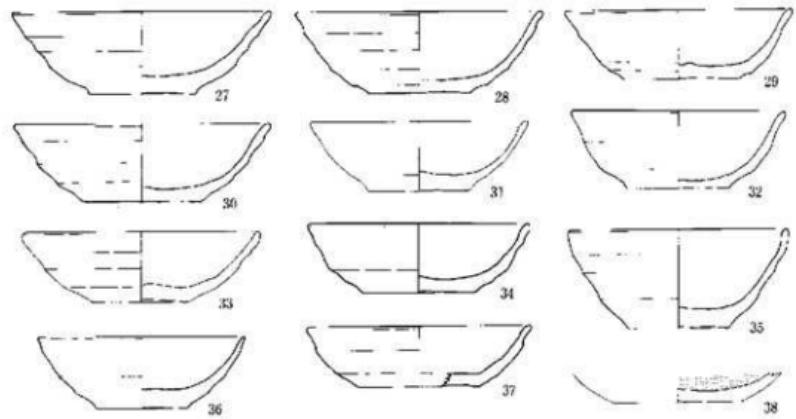




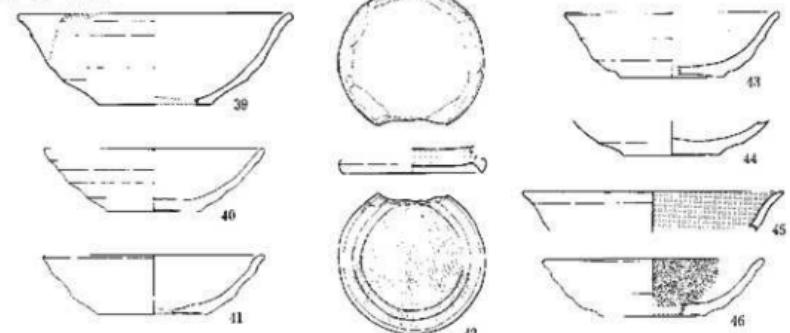
(1~24 SD07)



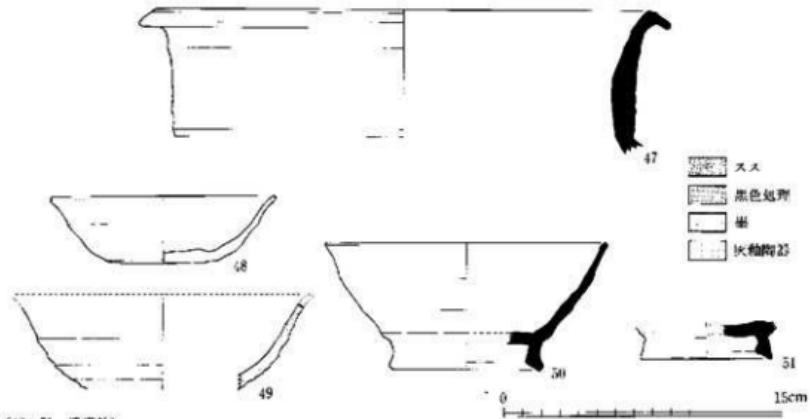
0 15cm



(27)~(38) S K14



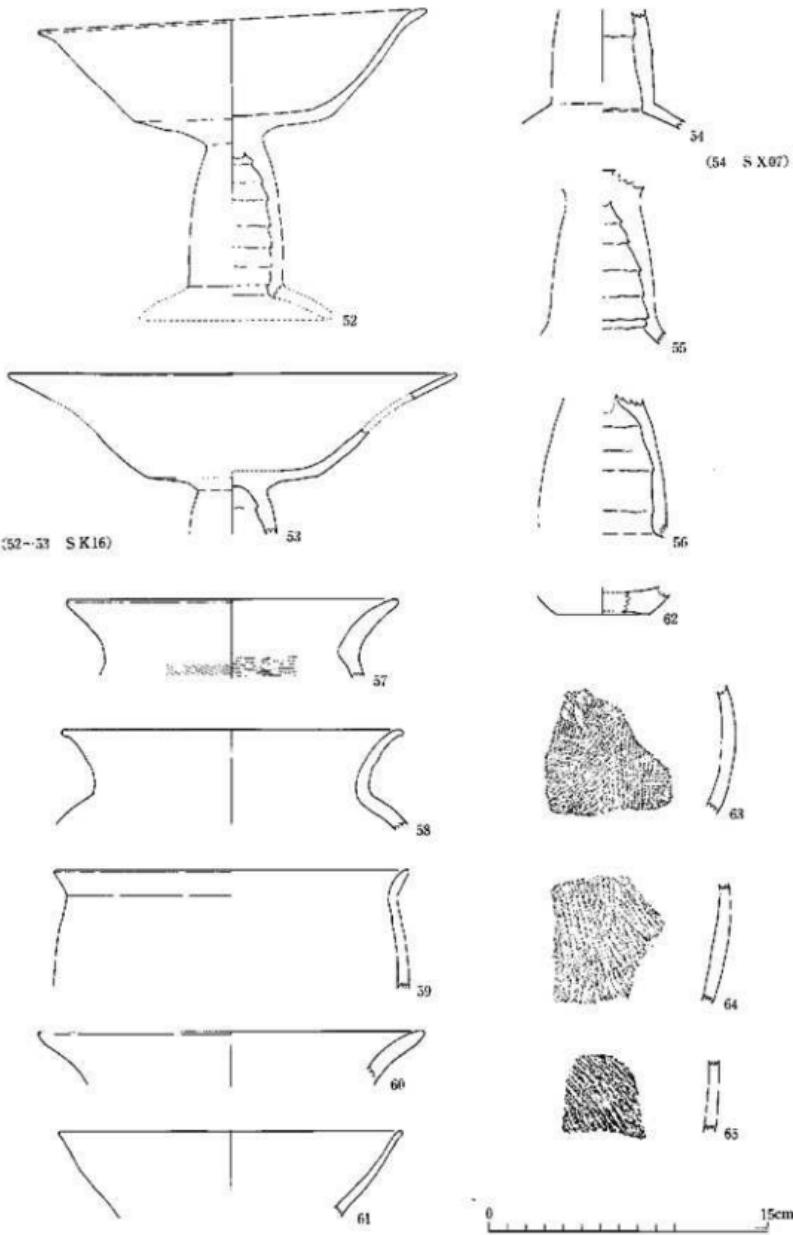
(39)~(42) S D01, (43)~(45) S D02, (46) S D08, (47) S D10



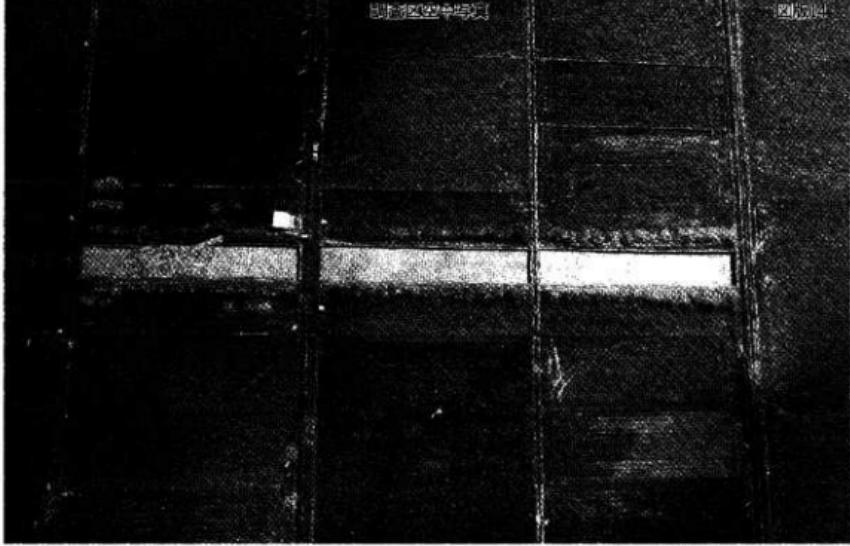
(48)~(51) 遺構外

0 15cm

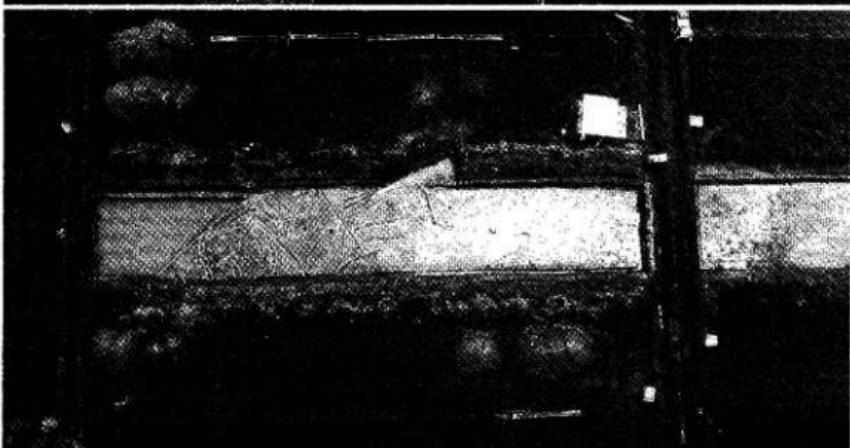
■	ヌヌ
■	黒色處理
□	墨
□	灰釉陶器



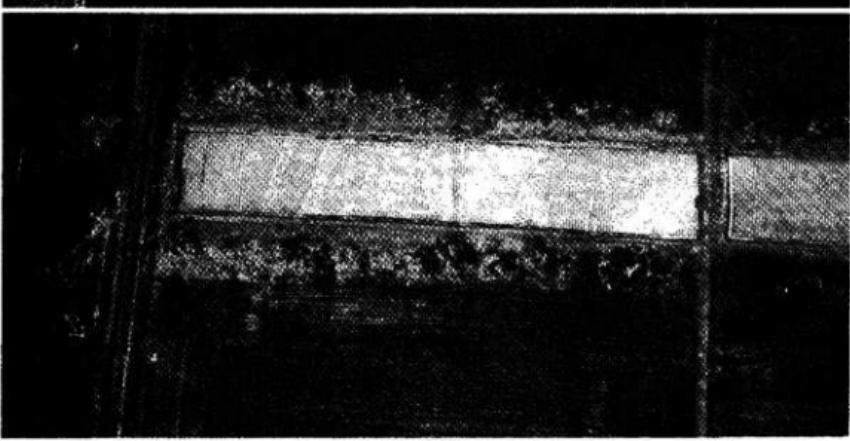
全景



I区



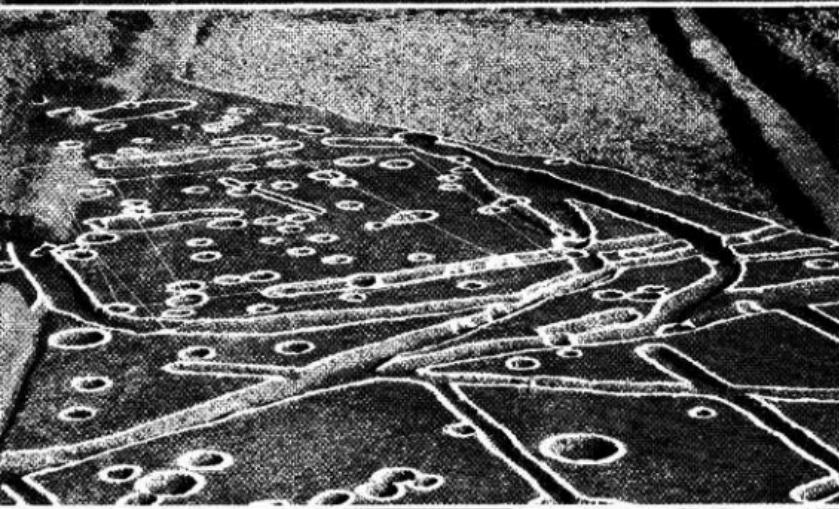
III区



I区俯瞰写真
(南から)



S B01・02



小漁群

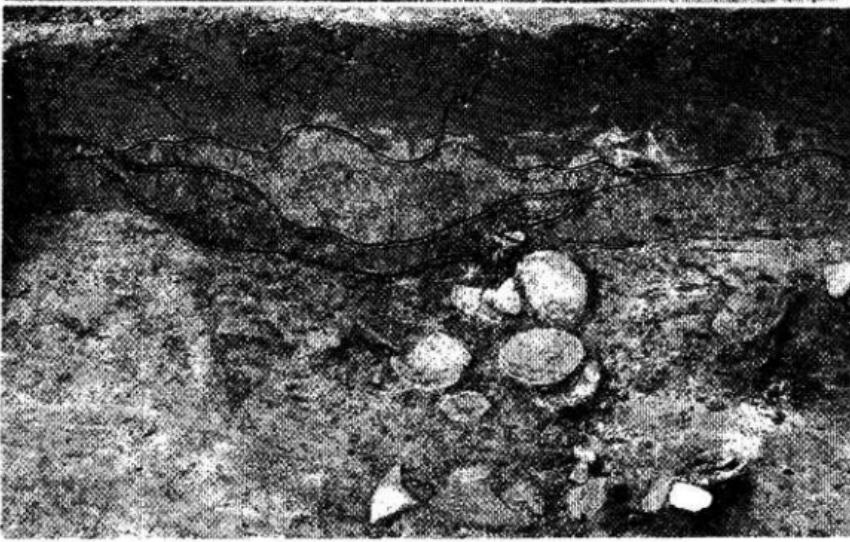
S D01·02
土層断面



S D07
土層断面



S K14
遺物出土状况





II区 S D 20



S K 15

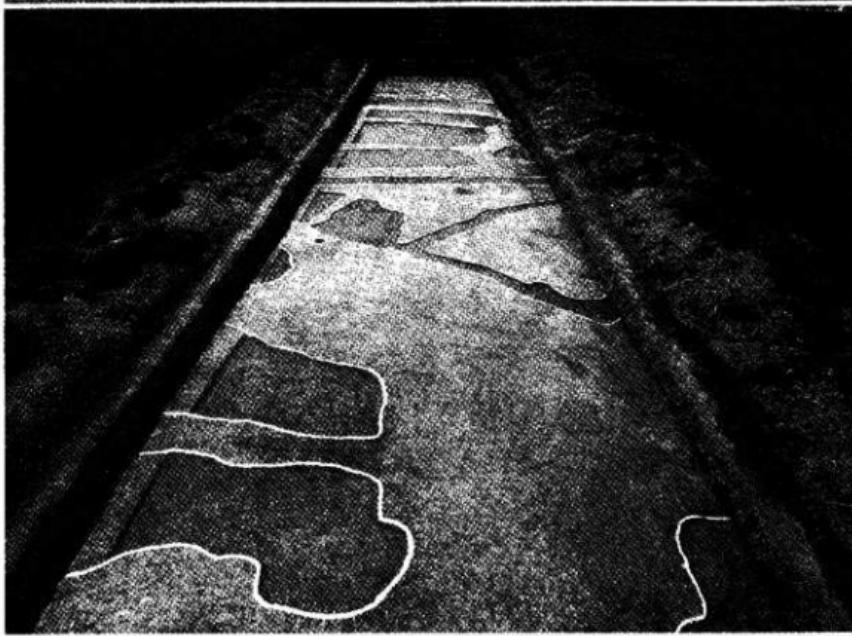


調査風景

III区側面写真
(西から)



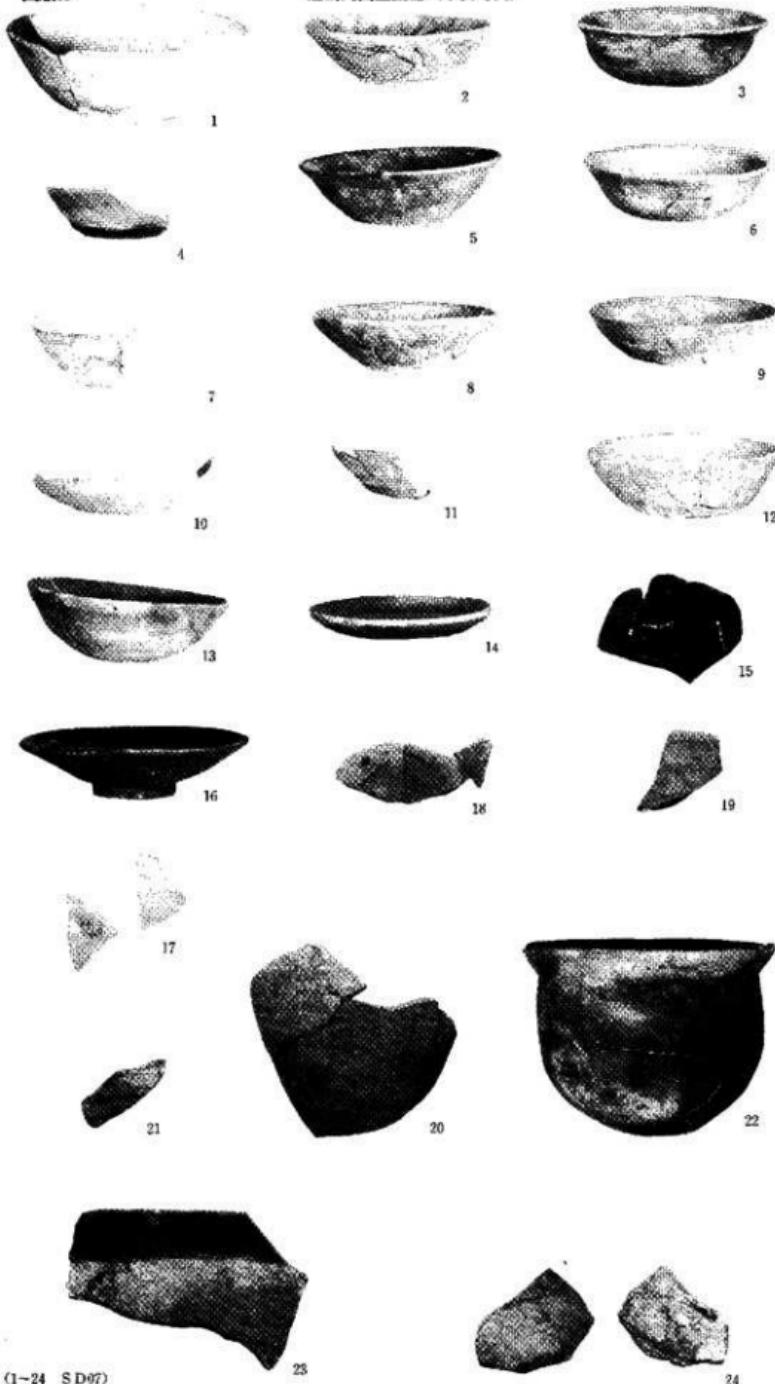
水田跡
(東から)



水田跡
(南から)

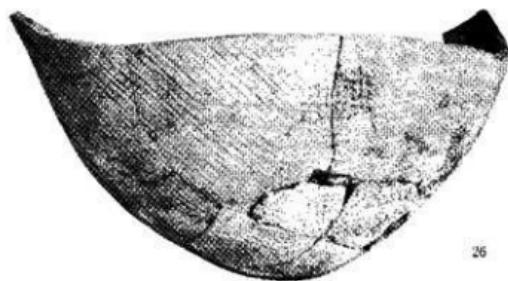


遺構内出土土器（平安時代）





25



26

(25~26 S D07)

遺構内・外出土土器（平安時代）



27



28



29



30



31



32



33



34



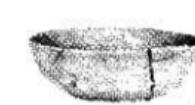
35



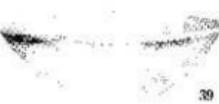
36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47

(27~43 S K14, 39~42 S D01, 43~45 S D02, 46 S D08, 47 S D10)



48



49



50



51



52



53

(52~53 SK16)



54



55



56

(54~56 SX07)



57



58



59



60



61



62



63



64



65

報告書抄録

ふりがな	かどしん いせき そとわった ちく
書名	門新遺跡 外割田地区
シリーズ名	和島村文化財調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	田中 靖
編集機関	和島村教育委員会
所在地	〒949-45 新潟県三島郡和島村大字小島谷3434番地-4 TEL 0258-74-3111
発行年月日	西暦 1996年3月29日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
門新遺跡	新潟県三島郡和島村 大字上鶴	154041	189	37度	138度	1993.4.26 ~1993.3.31	12,000	国道116号バ イパス建設 (谷地地区)
				35分	47分	1994.5.24 ~1994.9.27	3,400	県営園場整備 事業 (谷地地区)
				18秒	16秒	1995.5.26 ~1995.9.14	900	県営園場整備 事業 (外割田地区)

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門新遺跡	集落跡 水田跡	古墳時代 平安時代	（古墳時代） 水田跡 土坑 （平安時代） 掘立柱建物 櫓 土坑 田河道	土器群・須恵器・灰釉陶器 鉄滓 1基 2棟 1基 2基 1本 その他に磚・瓦など	

和島村埋蔵文化財調査報告書第5集

道路発掘事前総合調査に係る埋蔵文化財調査報告書

門 新 遺 跡

平成8年3月23日印刷
平成8年3月29日発刊

発行 新潟県和島村教育委員会
印刷 柳第一印刷所
新潟市和合町2丁目4番18号
電話 (025) 285-7161